弥生時代畿内の親族構成

春成　秀爾

はじめに
1. 弥生中期の埋葬原理
　a 大阪府東大阪市～八尾市山賀遺跡
　b 大阪府高槻市安満遺跡
　c 大阪府東大阪市瓜生堂遺跡
　d 大阪府東大阪市巨摩廃寺遺跡
　e 大阪府八尾市亀井遺跡
　f 大阪府茨木市東奈良遺跡
　g 大阪府豊中市勝部遺跡
　h 兵庫県尼崎市田能遺跡
　i 夫妻併葬墓の出現
2. 弥生後期の埋葬原理
　a 大阪府東大阪市巨摩廃寺遺跡
　b 大阪府高槻市紅茸山遺跡
　c 男性優位の墓制
3. 縄文晩期の埋葬原理
　a 大阪府東大阪市日下遺跡
　b 大阪府藤井寺市国府遺跡
　c 滋賀県大津市滋賀里遺跡
　d 出自別・世帯別の墓制
4. 弥生時代畿内の親族組織の位置
　a 畿内の社会
　b 北九州の社会
　c 畿内と北九州の比較

はじめに

小論においては，弥生時代畿内における親族構造の一端について述べ，前稿の九州の場合（春成　1984）との比較を試みる。扱う資料はやはり埋葬遺跡である。

弥生時代畿内の墓制を代表するのは，いうまでもなく，方形墳丘墓である。これはしばしば，方形周溝墓と呼ばれているが，東大阪市瓜生堂遺跡において保存良好な例が検出されて明らかになったように，本来存在した墳丘が流失あるいは削平されて溝だけが遺存した，という調査が進んでいない時点での一部の現状例に即した命名にすぎない。盛土は残存しているが「周溝は全く検出し得なかった」ものまでも「方形周溝墓」と記述した例（大阪文化財センター　1980：112～113）が登場するに至った現在，周溝の有無に拘束されず，しかもより実態に即した「墳丘墓」の名称に統一したほうがよい，と筆者は考えるのである。

この墳丘墓は，畿内地方では，弥生前期新段階に属する大阪府和泉市池上遺跡，同高槻市安満遺跡，同茨木市東奈良遺跡，滋賀県守山市服部遺跡などで発掘された諸例を最古とし，弥生中・後期に盛行することが判明している。しかし，これまでに報告されているもっとも良好な遺跡は，中・後期に属する河内と摂津の例であるから，ま

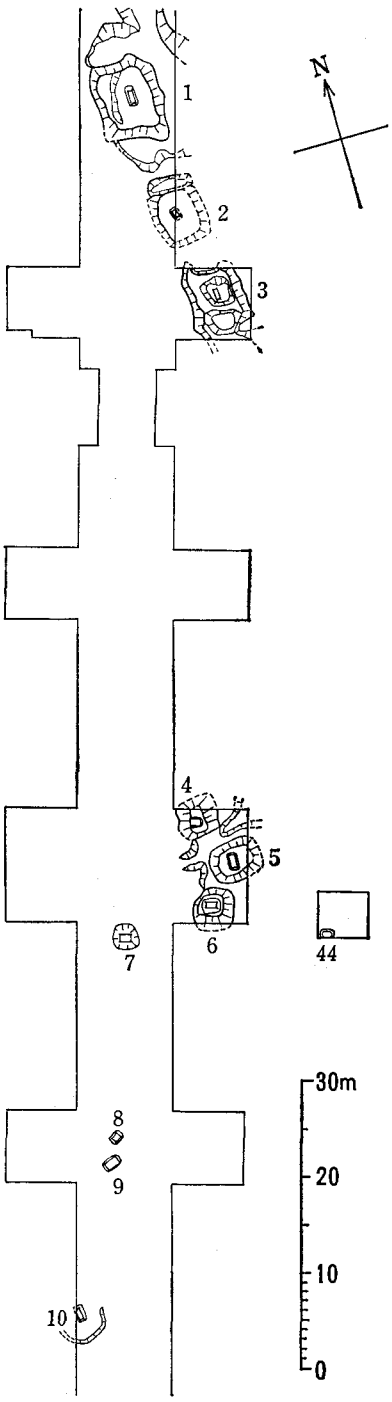

図1 東大阪市～八尾市山賀遺跡の墳丘墓の分布

（大阪文化財センター編 1984原図）

ずそれらを分析して当該期の埋葬原理をさぐり，次に先行する弥生前期さらに縄文晩期の様相について述べ，しかる後に弥生時代畿内，厳密にいえば大阪湾岸の親族組織の位置づけを試みることにしたい。

1. 弥生中期の埋葬原理

a 大阪府東大阪市若江南町～八尾市新家町・山賀遺跡

本遺跡は河内平野の中央部に位置し，弥生前期中葉に始まる拠点的な集落址の一つである。ここでは，1979—82年に大阪文化財センターによる近畿自動車道の事前調査で，第Ⅱ様式期に属する方形の墳丘墓が7基，木棺墓が3基検出されている。トレンチ発掘のために，全貌は明らかでないが，墳丘墓は1～3号，4～6号が50mの間隔をおいてそれぞれ一群をなしている。二群ともおそらく実数はもっと多いのであろう。

墳丘規模は，1号が8m×7m，2号が6.5m×5m，3号が5m×3.5m，4号が3m以上×4m，5号が4m×4m，6号が4m以上×5m，10号が5.6m以上×3m以上で，1号と2号を除くと他は小規模である。いずれも1墳丘につき木棺墓が1基あるだけである。遺存人骨によると，1号は男性(？)，2号は5—6歳，3号は成人，4号は12—13歳，5号は30歳代，6号は8—10歳，7号は5—6歳，9号は男性で20—40歳であった。なお，成人は3例とも屈葬されており，前代の遺習として注意される。

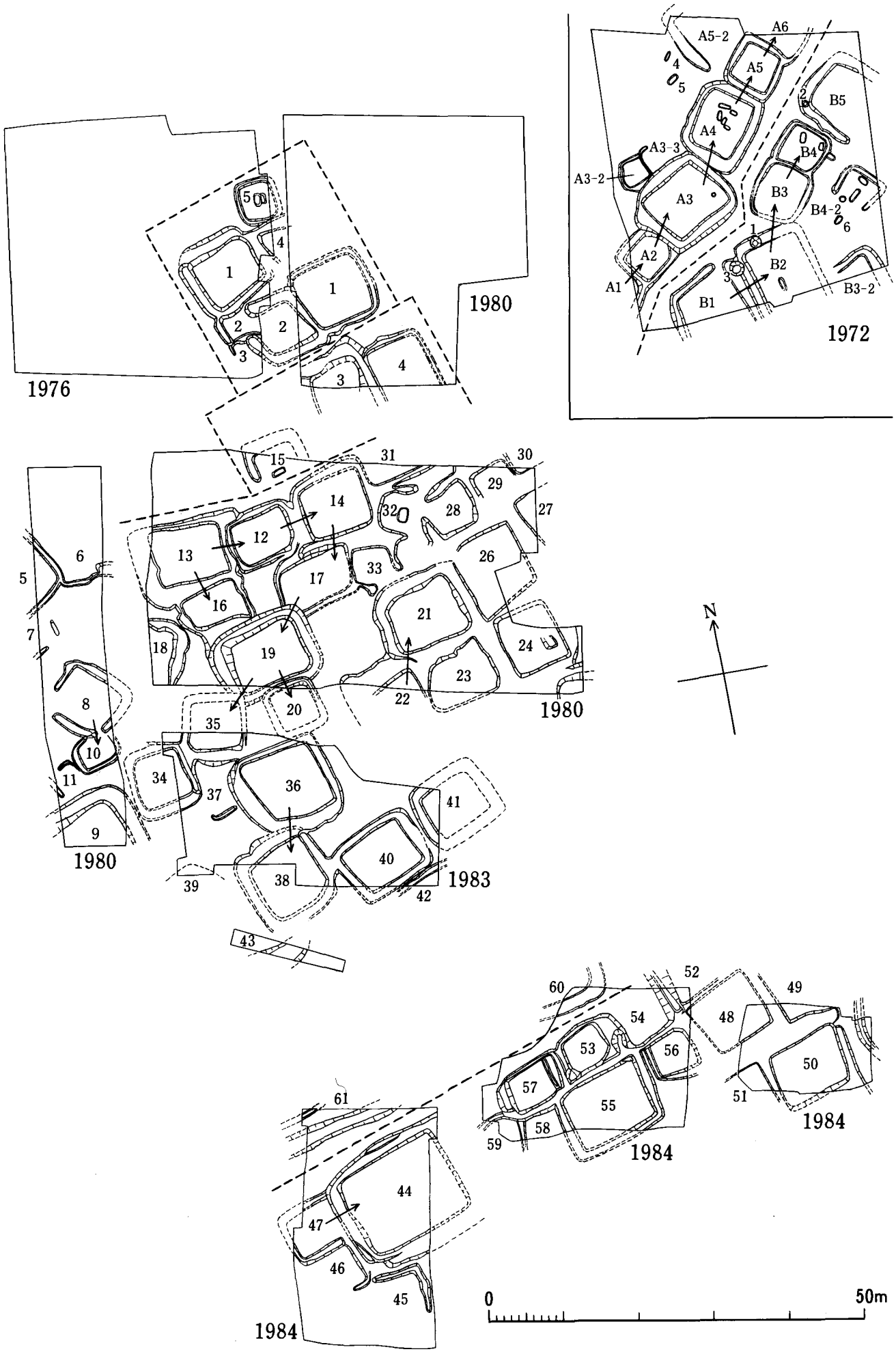

図 2　高槻市安満遺跡の墳丘墓の分布状況と群別（森田・橋本　1977，橋本　1984原図から作成）

以上のように，1～3号の小群は成人1，少年1，幼児1からなり，4～6号も成人1，少年2，幼児1からなる。無墳丘の8号は幼児とみられるので，9号とあわせて成人1，幼児1の組み合わせとみなされる。

木棺の型式は多様であるが，次の第Ⅲ様式期のそれを参考にするならば，小口板の先端を墓坑の両端に埋め込むⅠ型，底板上に小口板をのせるⅡ型の二型式に大別することができる。Ⅰ型は1・2・3・4・6・9号の6例，Ⅱ型は7・8・10号の3例である。すなわち，判明したかぎりではⅠ型は成人3例と幼児・少年3例，Ⅱ型は幼児2例であった。木棺の樹種は，Ⅰ型はヒノキを主としてコウヤマキを混えるのに対して，Ⅱ型はコウヤマキを主としているという違いが認められた。なお，1号・男性？の供献用土器は摂津系，2号・幼児のそれは河内系と判定されている。

本遺跡では，成人・幼児を問わず墳丘をもつ一群と墳丘をもたない一群とに分かれており，中期初頭にすでに，おそらく一居住集団の構成員であっても，死ぬと墳丘墓に葬られるグループと，そうでないグループとに分裂しているようである。しかし，この時期には無墳丘墓の被葬者たちもなお木棺墓に埋葬されていた事実は，その分裂の度合がまだそれほど強くなかったことを暗示しているのであろう。

b　大阪府高槻市・安満遺跡

淀川北岸の北摂平野の東端近くに位置する拠点集落の一つで，1972年以来，高槻市教委のちに高槻市埋蔵文化財センターの各種事前調査によって，方形墳丘墓87基が検出されている（森田・橋本　1977，橋本　1984)。

1972年の調査区（9地区）から16基，その西南約120mの京都大学農学部附属農場の東側の調査区から1976・80・83・84年に71基発掘されている。両調査区とも，墳丘墓は発掘区域内に周溝を接し，あるいは切り合って群集しており，区域外までひろがっている。両調査区とも第Ⅱ様式期に属しているが，別々のグループとして併存していたと推定されている。

9地区はさらに，周溝の連結あるいは連接の状況から少なくともA・Bの2群に分けられる。A群はA1からA6へ向かって次々と築かれ，B群はB1からB2を経てB3・B4へ向かう小群とB3－2へ向かう小群に分かれている。墳丘の規模は，A群は，A2が5m×4.4m，A3が8.8m×7.2m，A4が7.8m×6.8m，A5が5.3m×5.1mというように，小→大→大→小という変化をみせる。それに対してB群は大→大→小^小_小という変化を示しており，群形成の歴史に何らかの差異が認められる。

埋葬が確認されたのは，A4で5基（内訳は成人1，幼児4か)，B2で1基（成

人1か)，B4で2基（成人1，幼児1か)，B4－2で2基（成人2）である。いずれも墓坑の深さは10cm内外であって，墳丘は完全に削平されているから，墓坑が検出された墳丘墓の場合でも，他にも埋葬はあった可能性が残されている。これらのうち明らかに中心埋葬といえるのは，B4－2の2号で，長さ2.1mを測る。そして，それと長軸が直交方向で周溝寄りの1号は長さ1.6mと短い。すなわち，成人を埋葬した大小の土坑墓が直交方向につくられ，墳丘中央に大形のものが位置しているのである。

京大農場東側の場合も，墓地区が全面的に発掘されたものではないこと，各年度の調査区間に未調査部分を残していること，そして詳細については未報告であることから，分析は容易ではない。とりあえず周溝間の切合関係と間隙を参考にしてその分布状況を観察するならば，大小の墳丘墓7～8基前後が連結されてつくられた1群が，約10群存在するように看取される。調査者によると，時期が確認された例はすべて第Ⅱ様式期であるから，これらの大部分は同時併行的に形成されつつあったことになろう。墳丘の規模は，13m×10.5mの44号を最大とし，3.7m×3mの11号を最小とするが，多いのは一辺7～8m大のものである。

墳丘が削平されていたために埋葬が確認された例は4基にとどまるが，うち3基までは墳丘の中央に1基だけ墓坑があり，単独埋葬と考えてよい。1980年—24号は墓坑は1基であるが，その位置は一端に寄っているので，複数埋葬であった可能性もある。

安満遺跡では1墳丘に1人埋葬している例と数人埋葬している例の両者が知られているので単純化はできないが，第Ⅱ様式期という限られた時間幅のうちに，これほど多数の墳丘墓が残されたという事実は，1基あたりの被葬者数が少なかったことを示唆しているのであろう。

c　大阪府東大阪市瓜生堂～若江西新町・瓜生堂遺跡

瓜生堂遺跡は，河内平野の中心部に位置する弥生時代前・中期の拠点集落の一つである。墓址については，1970年に小阪ポンプ場北側で5基の方形墳丘墓が検出されて注目されたが（中央南幹線・調査会　1971)，その後1973年から1980年までの間に2次にわたって小阪ポンプ場拡張のために瓜生堂遺跡調査会による発掘調査が実施された。その結果，部分発掘にもかかわらず，市松状に密集分布する保存状態良好にして明瞭な墳丘墓15基の存在が知られた(瓜生堂遺跡調査会　1982)。さらに，その後1981—82年に，大阪府教育委員会の調査により，16号～23号の8基の存在が追加された。

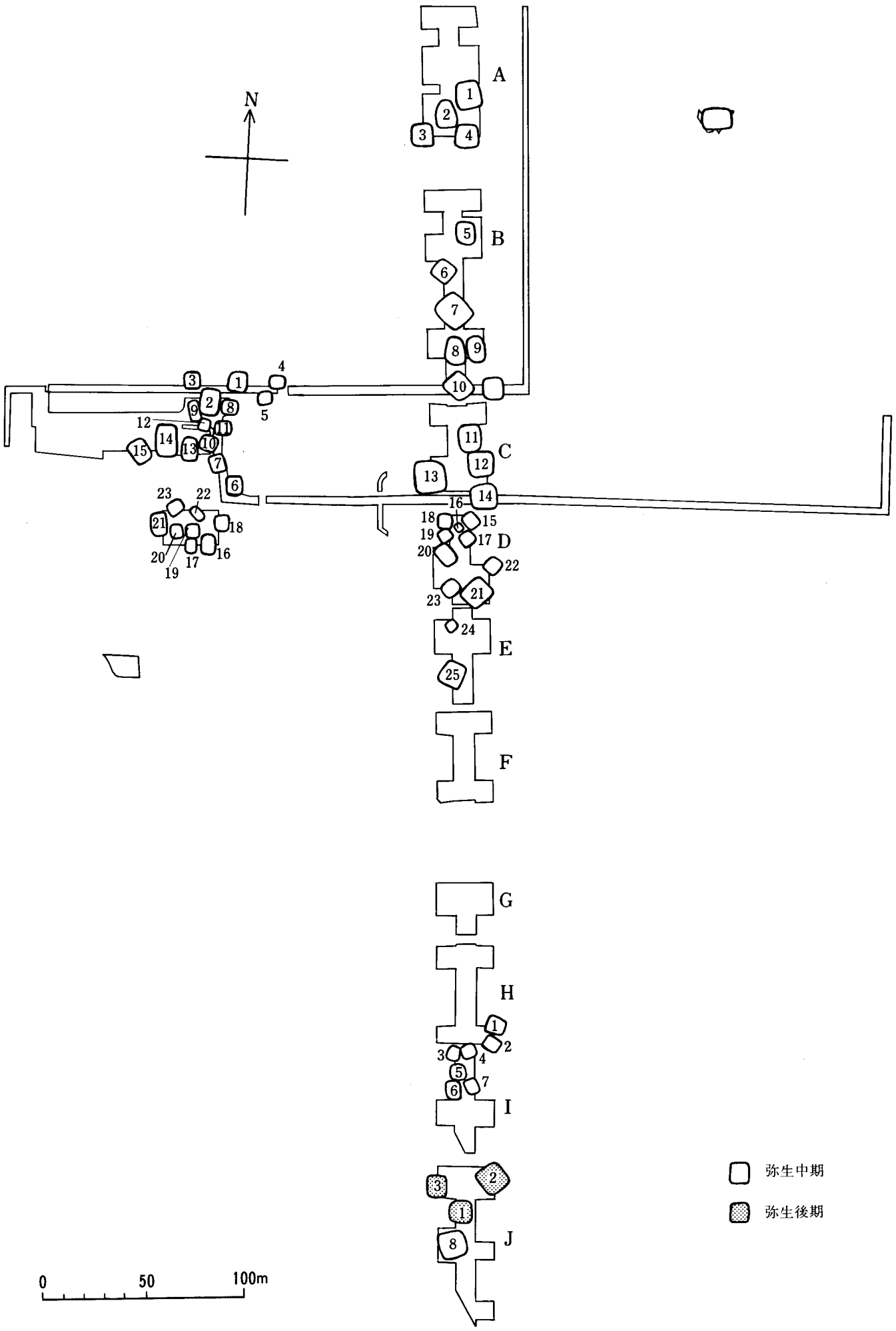

図 3　東大阪市瓜生堂・巨摩廃寺遺跡における墳丘墓の分布状況（第11回埋蔵文化財研究会配布資料と現地説明会配布資料から作成）

その一方，1974年から1979年の間に，大阪文化財センターによる近畿自動車道関係の事前調査が上記の東側で南北方向に行われ（大阪文化財センター編　1980），25基の墳丘基の存在が確認されたほか，マンション建設のための予備調査時にさらにその東側で1基検出されている。すなわち，これまで計50基が検出されているが，面積的には東西300m以上，南北305mにおよぶ墓地区のまだ1/5も発掘していないので，実際にはそれをはるかに上まわる基数になることが予想される。

なお，瓜生堂遺跡の墓地区南端の165m南に，次項で述べる巨摩廃寺遺跡の墓地区の北端がきており，両遺跡はきわめて近い位置にある。

最初に，調査会担当地区の墳丘墓群についてみていきたい。ここだけでも，15基とその後の大阪府教委による8基を加えても，まだ未掘部分が広く残されているので，おそらく30基をはるかにこすと思われる大小の墳丘墓が近接して築造されているが，墳丘裾が相互に接しているものと，やや離れているものとがある。また，墳丘の一辺がほぼ平行するものと，そうでないものとがみられる。墳丘の規模については，15m×10m大の大形長方形で埋葬数の多いものと8m×8～10m大の小形方形または長方形で埋葬数の少ないものとの違いが認められる。発掘の及んだ範囲が墓域のなお一部分にとどまっているために，以上のような観点からグルーピングを行うにしても，容易ではない。現状では，大形墳丘をもつ2号と14号が，伴出土器が第Ⅲ様式（古）と第Ⅳ様式であることからも，中核的な位置を占め併存していたこと，9号と12号，そしておそらく8号の小形墳丘墓は2号墳丘墓と一部周溝を共有している点から後者から派生したものであろうことが推定される。なお，9号墳丘墓出土の供献土器の一部は2号墳丘墓のそれと接合する同一個体であった。また，10号・11号・13号・14号も周溝の共有関係から一連のものとみられるが，それらのうちの母体は最大規模の14号であった可能性が強い。15号墳丘墓は，墳丘の方向を異にするが，供献土器はやはり第Ⅲ様式（古）と第Ⅳ様式を示しているので，2号・14号と併行して埋葬行為が続いていたことになる。推定すれば，この地区では，第Ⅲ様式古段階に，墓域を定めてその内部に一定の間隔をおいて大形墳丘墓を3基以上築成し埋葬を開始した。その後，墳丘墓が埋葬によって充満するころに，それぞれに接して派出する形で小形墳丘墓が次々と築かれていったのではなかろうか。

なお，当初から注目されていたのは，墳丘墓群と溝を隔ててその外部に3～4基単位で群在する無墳丘土坑墓群である。これらの土坑墓からは明瞭な時期を示す土器は出土しなかったが，第Ⅲ・Ⅳ様式土器を包含する溝の上に7号土坑墓がつくられていた事実から，調査者は土坑墓群と墳丘墓群を同時期とみなした（中央南幹線・調査会

1971：35)。そこで，大形の2号墳丘墓の被葬者を家長世帯と措定し，世帯共同体内で家長世帯がそれ以外の世帯員より優位にたっているという階層性の存在が指摘されたのである（都出 1970：51～52，1983：96)。しかし，これだけの数の墳丘墓が見つかり，しかも2号に匹敵しそれと併存する大形のものも少なくない点，さらに出土した供献土器によれば，蝟集する少なくとも12基は第Ⅲ様式（古）の時期に埋葬が行われている点を重視するならば，少なくとも，墳丘墓群を家長世帯に限定することは困難になってきたといえよう。もちろん，河内平野の拠点集落たる瓜生堂集団が数個の世帯共同体とそれに対応する数個の家長世帯を内包するものであった可能性は大きいであろうが，墳丘墓の被葬者はより広くとらえたほうが妥当であるように思われる。

さて，瓜生堂遺跡で完掘され，しかも内容がもっともよく明らかになっているのは，2号墳丘墓とそれに接する9号墳丘墓である。2号は14.8m×9.7mの長方形墳丘で北辺中央と東南隅に陸橋部をもつ。遺体は成人男女各3人が組合式木棺に葬られ，推定幼小児（1号土坑墓からだけ乳歯を検出）が土坑墓6，壺・甕棺6に葬られている。注目されるのは次の諸点である。

まず，東頭位の4・3号男性棺と2・1号女性棺，北頭位の6号男性棺と5号女性棺がそれぞれ並行しており，男女3組が意図的に並葬されているとみられることである。これを仔細にみると，4号棺はその墓坑を3号棺の墓坑によって一部切られており，3号棺に先行することは明らかである。2号棺と1号棺はその中間を鋼矢板によって破壊されたが，もともと墓坑の切り合いはなかったようである。しかし，1号棺は墳頂平坦部の末端に位置しており，中央よりの2号棺よりも後出するとみられる。そう考えてよければ，4号棺と2号棺，3号棺と1号棺を対とみることができる。つまり，この墳丘墓においては，最初に中央部をあけてその南北に4号男性棺と2号女性棺が配置され，そのあと墳頂部の平坦面の残り部分に次々と埋葬が行われていったと説明できるのである。

報告者によれば，2号墳丘墓上の土器棺の時期は，第Ⅲ様式の古・新段階を，供献土器は第Ⅲ様式（最古)・(古）さらに第Ⅳ様式を示している，という。しかし，瓜生堂遺跡における中期土器の細分案は，層位学的裏づけをもたない型式学的方法に依存しており，その後もその案を証明するような例は見出されていないために，大方の認めるところとはなっていない。むしろ，「最古」も（古）のうちに含めて理解すべしという意見のほうが強いのである。その一方，第Ⅲ様式（新）と第Ⅳ様式との区別も，第Ⅳ様式を前半と後半とに分けてしまった結果，はなはだ不鮮明となってしま

図4　東大阪市瓜生堂遺跡（小阪ポンプ場内）の墳丘墓群と土坑墓群の分布（瓜生堂遺跡調査会　1982原図から作成）

表1　瓜生堂遺跡（小阪ポンプ場内）の墳丘墓の時期

	第Ⅲ様式（古）	第Ⅲ様式（新）
2　号	(**5**　(**2**)　(**1**) (7　(1)	**2** 1　(3)
3　号	2	
4　号	1	1　(1)
5　号	1　(4)	
6　号	1	(2)
7　号	2　(2)	
8　号		(**1**)
9　号	1　(1)	
10　号	1	
11　号	1	
13　号	3	(1)
14　号	(**1** (14　(3)	 1　(2)
15　号	4　(1)	1　(1)

凡例　**1**　(**1**)　**土器棺**
　　1　(1)　供献用土器
　　河内産　他地方産

表2　瓜生堂遺跡（小阪ポンプ場内）の墳丘墓の被葬者
（単位はm，？は推定，ゴチ数字は土坑）

墳　丘	墓	性	年　齢	墓坑長	墓坑幅	木棺長	木棺幅	備　　考
2　号	1	♀	A			1.40	0.4	3と対
	2	♀	J—A	2.49	1.2	1.55	0.45	4と対
	3	♂	A	2.75	1.66	2.1	0.6	1と対
	4	♂	A	3.15	1.7	1.65	0.55	2と対，初葬
	5	♀	A	2.32	1.2	1.70	0.50	6と対
	6	♂	A	2.96	1.45	1.70	0.50	5と対
9　号	1	♂？		2.9	1.53	1.80	0.60	
10　号	1	♀？		1.8	0.75			
13　号	1	♀？		2.05	1.00			
	2							
	1	♂	A	1.8	0.9			
14　号	1	♂		2.50	1.15	1.95	0.60	2と対
	2	♀		2.15	1.00	1.82	0.58	1と対
	3	♂？		2.70	1.15			4と対？
	4	♀？		2.20	0.90			3と対？
15　号	1	♂？		(2.30)	(1.30)	(1.90)	(0.45)	初葬
	2	♂		(2.40)	(1.10)	1.81＋		
	3	♀		2.15	1.60			
	4		I	1.30	0.93			
	1	♂		2.00	0.70			**2**と対？
	2	♀？		1.65	0.76			**1**と対？

い，最近では「第Ⅲ—Ⅳ様式」という表現すら用いられている。したがって，ここではとりあえず，瓜生堂遺跡の小阪ポンプ場地点では墳丘墓の多くは第Ⅲ様式（古）の時期に築造され，供献用土器の量からして，埋葬は（古）を中心とし（新）まで継続すると理解しておきたい。いずれにせよ，その時間幅は数十年ないし100年近く見積もるべきであろう。そうであれば，これら3組の男女は3代にわたっている可能性が強いと思われる。

次に，男性の墓は3代にわたって，墓坑の一部を切りあっているのに対して，女性の墓は3基とも切りあう関係が認められない点が注意される。また，3号棺と1号棺の配置に鮮明にあらわれているように，男性の墓を墳丘の中央に配置するという，いわば男性優位の棺配置が看取される。この点からしても，男性3棺の墓坑の切合関係は意図的である可能性が強く，それは3人の男性の系譜的なつながりを示そうとしているようにみえる。もっとも，3代目に関しては，男女とも4号の墓坑を切っているので，4号男性のあとを継承したのが，6号男性であったのか，5号女性であったのかは，これからだけでは判定はできないというべきであろう。

木棺の構造はすべて箱形の組合式であるが，小口板の形制により，大きく2型式に分かれる。Ⅰ型は，底板の端の中央を凹字形に抉りとり，そこに凸字形に加工した小口板を差しこむもので，この場合は，墓坑の底にも小口板をたてるための溝を設けている。Ⅱ型は，底板の端から十数cm内側に溝を掘り，その上に小口板をたてるものである。2号墳丘墓では，4号棺がⅡ型，5号棺がⅠ型と報告され，他は遺存状態がよくないために言及されていない。しかし，実測図から判断するかぎり，4号棺と2号棺もⅡ型である。すなわち，対になる4号男性棺と2号女性棺がともにⅡ型である一方，6号男性棺はⅡ型，5号女性棺はⅠ型であるというあり方を示している。なお，棺材は6号棺の側板にヒノキが用いられているが，同棺の底板を含めて他はすべてコウヤマキである。木棺の型式からすると，先に判定を留保した4号棺の被葬者の後を襲ったのは6号棺の人物であった可能性が大きいと思われる。

幼小児の土坑墓・土器棺墓のうち6基までは1号・2号女性棺の墓坑を切り，あるいは近接してつくられており，女性との結びつきの強さを示している。3号棺の墓坑を一部切っている2号土坑墓や6号棺に近接する1号壺棺のような例もあるので，幼小児イコール女性集団帰属と一概にはいえないが，注意を要する事象である。

なお，副葬品・装身具の類は瓜生堂遺跡のどの墳丘墓からも出土していない。また，抜歯の習俗もまったくみられない。

2号墳丘墓には周溝がめぐらされているが，それを無視して異常に接近した位置に

築かれているのが9号墳丘墓である。12.7m×6.5m 規模の長方形で，中央やや北よりに1号木棺墓がつくられているだけである。しかし，2号墳丘墓のあり方を参考にすれば，この9号墳丘墓にも当初は1号棺の南側に少なくとももう1基木棺墓をつくるつもりであったことは，ほとんど間違いない。1号棺は，構造はⅠ型，材質はヒノキであった。遺体は消滅していたが，木棺の長さ，墓坑の規模が2号墳丘墓等の男性墓に近い点から推察すると，男性の確率が高い。伴出した供献用土器は第Ⅲ様式(古)を示しており，2号墳丘墓における最初の埋葬との時間差はほとんどない。その土器のなかに，他地方，おそらく摂津産と推定される壺が混在している事実は，Ⅰ型木棺の意味を考えていくうえでまことに示唆的である。

12号墳丘墓は，1辺5mほどの小形で9号と一部連結している状態を示しているが，発掘されていないために内容は明らかでない。

14号は，墳丘規模は推定16m×10.8m，高さ1.1mを測り，墓葬は完掘されていると考えてよい。西周溝は15号と，東周溝は13号と共有している。木棺墓は4基が検出され，そのうち中央部に位置する1号木棺が男性，その斜め西の2号木棺が女性と鑑定されている。3・4号木棺の人骨は未鑑定であるが，1・2号の墓坑の長さ・幅を参考にすれば，3号は男性，4号は女性と推定される。つまり，この墳丘墓においても，男女2棺の並置が2例認められ，しかも男性棺が女性棺よりも中央に位置しているという傾向を明瞭に読みとることができる。幼児埋葬は壺棺が1基あるだけである。土器棺・供献用土器は第Ⅲ様式（古）を示している。

15号墳丘墓も，南半部が未調査である。墓葬は木棺墓4，土坑墓2の存在が判明している。初葬とされる1号木棺を墳丘の中央に位置すると考えるならば，墳丘規模は推定12.5m×10mとなる。性は，1・2号木棺と1号土坑墓が男性，3号木棺と2号土坑墓が女性，4号木棺は幼小児であった。男女の対関係は南側が不明なので確定できないが，この場合は墳頂部における配置関係から2号木棺・男性と2号土坑・女性を対と考えるならば，1号木棺・男性はそれと90度頭位をちがえる3号木棺・女性と対になり，さらに4号木棺幼児もこの男女との関係が深いと理解すべきであろうか。供献用土器は，第Ⅲ様式（古）が主体で他に同（新）が出土している。

13号墳丘墓も南側1/3ほどが未調査のまま破壊されたが，墓葬はすべて発掘されているとみてよい。周溝は東・西側だけでそれぞれ10号・14号と共有している。墳丘規模は推定12m×8.8m である。墓葬は木棺墓2，土坑墓1ですべて北頭位である。被葬者の性は墳頂東寄りの1号木棺墓は不明，中央の2号木棺墓出土人骨は未鑑定だが，遺骸の大きさからすると，1号が男性，2号は女性であろう。西寄りの1号土坑

墓は18—25歳の男性である。すなわち，中央に女性，その両側に男性を埋葬したものと推定される。出土した供献用土器は，第Ⅲ様式（古）と（新）で，後者は他地方産である。

10号墳丘墓は，13号と周溝を共有し，9.5m×9.5mの不整方形で，墳頂中央部に木棺墓1，土坑墓2が残されている。1号木棺は墓坑の長さ1.8mの小規模なもので，人骨は遺存状態が悪く鑑定されなかったが，おそらく女性であろう。1号土坑墓は5—6歳の小児である。2号土坑墓は，土坑の輪郭が判然とせず，成人の下肢骨の遺存から北頭位と推定された。あるいは，男性であろうか。供献用土器は，第Ⅲ様式(古)である。

なお，11号も10号と連接するとみられるほぼ同規模の墳丘墓のようであるが，発掘されていないために詳細不明である。

次に大阪文化財センター調査区の状況をみていきたい。南北方向に入れたトレンチは北からA・B……地区と名づけられたが，そのうちA～E地区の305mの間に合計26基の墳丘墓が確認されている。ただし，道路幅だけの調査にとどまっているために，全貌のわかる例は少ない。しかしながら，次の諸点は明らかに指摘できる。

墳丘の規模は，最大は7号の16.1m×15.4m，最小は16号の4.2m×3.8mであるが，長辺が15m前後のものが多い。小阪ポンプ場内の墳丘墓群と比べて著しい特徴は，墳丘が方形を意識しながらも整っていない点である。埋葬施設は組合式木棺が4例（4号—1はⅡ型，12号—1はⅠ型？，コウヤマキ製？，15号—1はⅡ型，21号—2はⅡ型），田舟転用の木棺が1例（23号—1），土器棺が3例で，他の45例は土坑墓であった。すなわち，木棺の使用頻度はきわめて低く，また土坑墓とされたものも形状が不整形の例が少なくなく，報告者自身が墓かどうか疑っている例が含まれている。また，墳丘上での墓葬の配置も，墳丘のどちらかの辺に平行させることをしなかったり（2号—1，4号—1，6号—1・3，7号—4，12号—1，13号—2，20号—1・2），墳丘の片側に寄っていたりして（2・4・12号），雑然としている。その結果，2墓葬の対関係などはまったく指摘できない。そうしたなかにあって，特徴的なものが，15号（男性），16号（幼児），24号（壺棺）で，墳丘中央にただ1体の埋葬があるだけである。

土器棺や供献用土器は，第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式前半を示しているので，1遺跡における以上のちがいは，第Ⅲ様式古段階から新段階への移行時に生じた変化としてとらえることができよう。

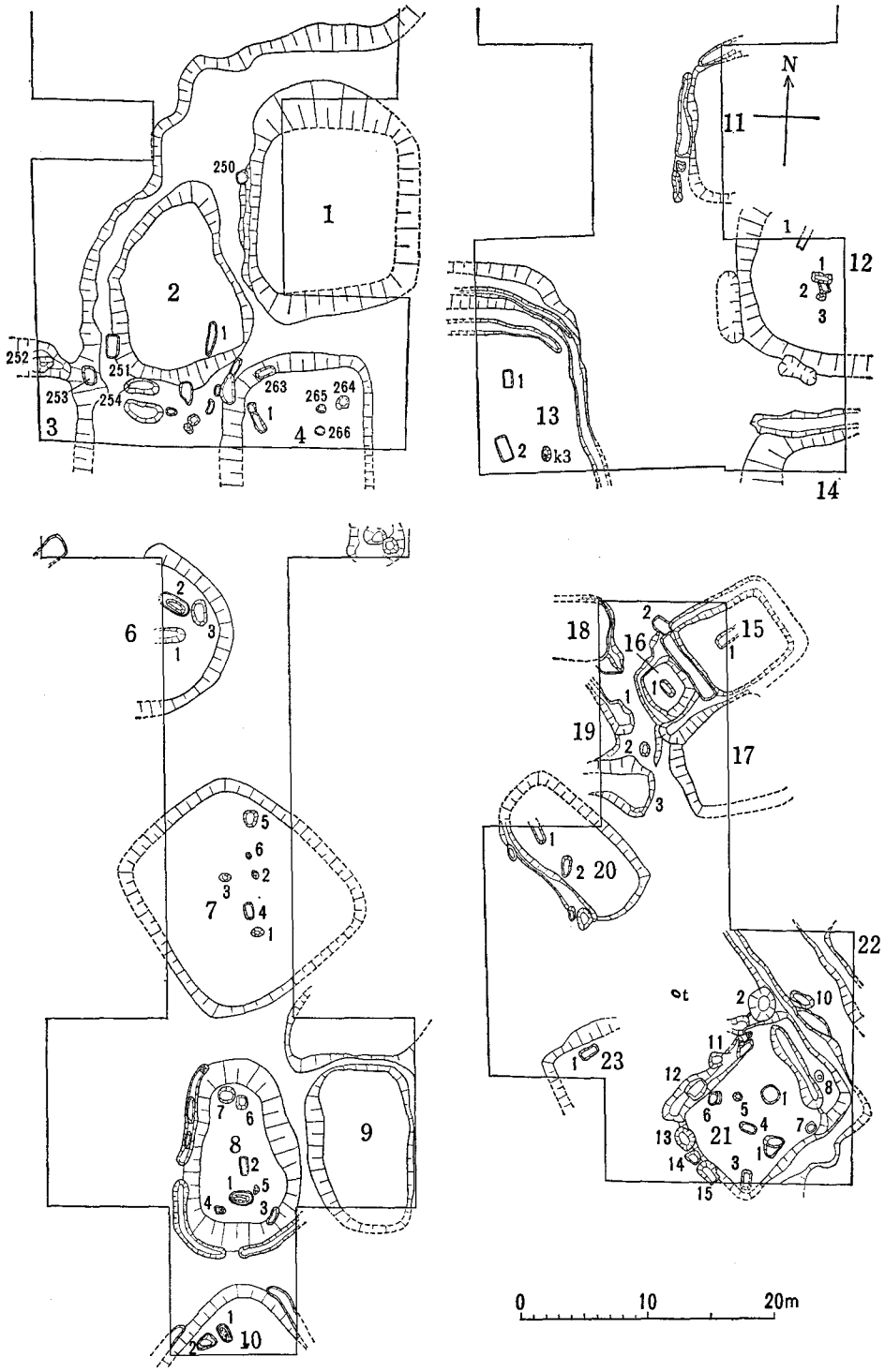

図 5　東大阪市瓜生堂遺跡(近畿自動車道関係)の墳丘墓（大阪文化財センター　1980原図から作成）

d 大阪府東大阪市若江西新町・巨摩廃寺遺跡

本遺跡も近畿自動車道の事前調査が1978—80年に大阪文化財センターによって実施された（玉井ほか 1982)。瓜生堂遺跡の南限から165mを測る地点から始まる墓地区は，南北120m，東西は不明である。この範囲内から中期に属する墳丘墓は8基検出されているが，うち1～7号はH・I地区に密集し，8号だけは墓地区の南端J地区に単独で築かれている。なお，J地区の北寄りに後述する後期に属する墳丘墓3基が築かれている。

調査は墓地区をトレンチ状に発掘する形をとっているので，墳丘の一部をひっかけただけの1・3・4号の詳細は不明である。しかし，墳丘はいずれも方形に整っているようである。2号は推定1辺9mの墳丘をもち，西半部から木棺墓3，甕棺墓1が検出されている。2号木棺は壮—熟年男性を葬っていた。1号木棺も人骨は遺存していなかったが，長さ1.74mの木棺の底板は男性を葬っていたことを暗示する。3号木棺は土層の切り合い関係からすると，1・2号木棺に先行するが，底板長0.79mは明らかに幼児を埋葬していることを示している。木棺は3基ともI型，コウヤマキ製で，墳丘の中央は避けており，また辺に沿わせて配置してある。この棺配置からすると，1号棺と対になる木棺が未発掘部分に埋もれている可能性がある。

5号は，1辺9.5m，墳頂部はほとんど全掘されたが，中央に木棺墓がただ1基あるのみである。木棺は内法長1.57mを測るので，膝を軽く曲げた男性を埋葬しているのかもしれない。

6号は1辺9.1m，墳頂部は3/4ほど発掘されたが，中央から少し外れて壺棺が1基検出されている。残りの面積からすると，墓葬はこの1基だけとみてよいであろう。

以上の7基は，土器棺の型式などから第Ⅳ様式前半と考えられている。

単独で見つかっている8号は，むしろより南に展開する若江北遺跡に伴う墓地区の一部ではないかとも考えられている。墳丘は9m×10mで，陸橋部を2個所残して深い周溝を掘鑿した整然としたもので，埋葬は墳丘中央に木棺1基だけである。人骨は性不明，壮年とされている。墓坑は2段になる瓜生堂および巨摩廃寺遺跡ではみられなかった北九州に多い型式である。時期は第Ⅳ様式後半とみなされている。

以上のように，巨摩廃寺遺跡の墳丘墓では，第Ⅳ様式期前半には1墳丘多葬例もあるが単葬例のほうが卓越し，1例だけであるが第Ⅳ様式期後半には1墳丘単人葬となっている。単葬例の場合，被葬者は男性と推定される例と幼児例があるのに対して，女性と推定可能な例は指摘できない。

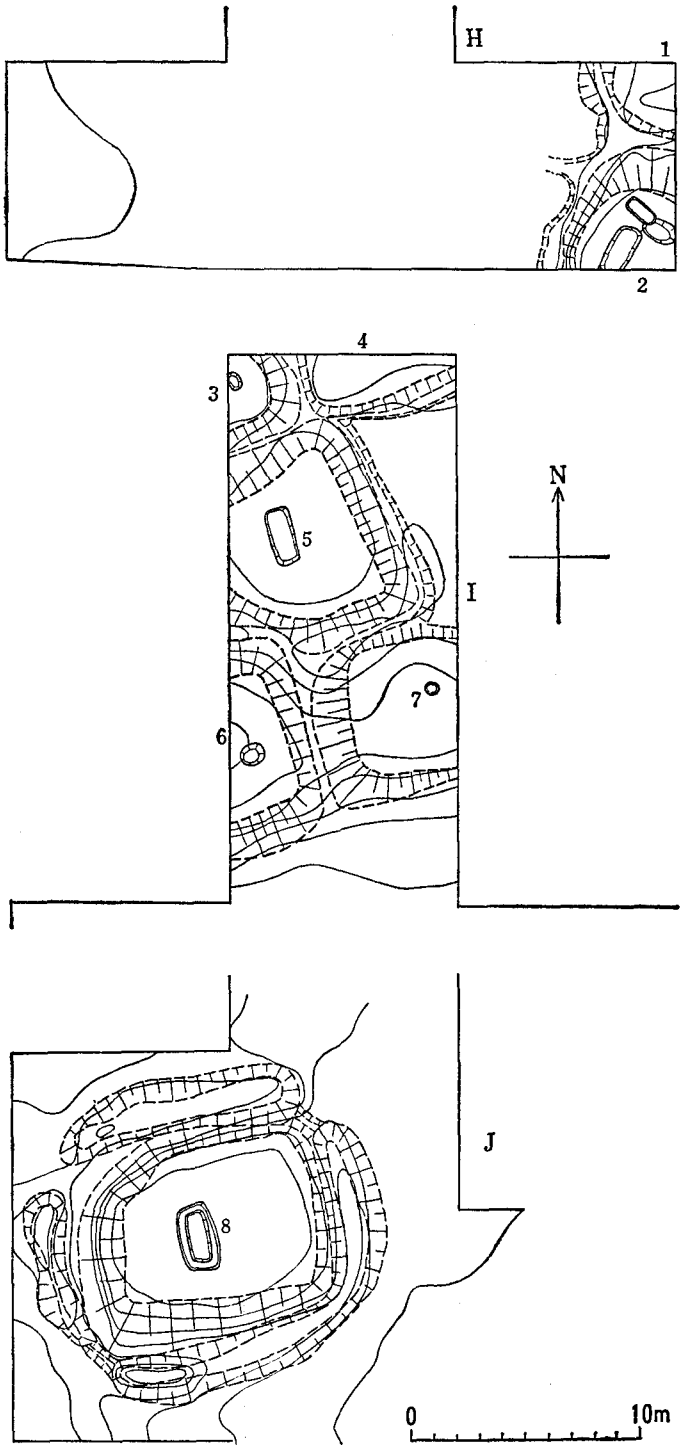

図 6　東大阪市巨摩廃寺遺跡の墳丘墓（玉井ほか　1982原図）

e 大阪府八尾市南亀井町・亀井遺跡

亀井遺跡からは，1980—81年の大阪文化財センターによる長吉ポンプ場築造の事前調査時に墳丘墓が検出されている（中西ほか編 1982)。墳丘墓は，間に「共有溝」をもつ1号と2号の2基に数えられているが，1号における2棺の位置が南端に寄りすぎていること，そのために6号棺の墓坑の一部を「共有溝」によって削られていること，しかも6号棺の墓坑は1号坑のそれによっても一部切られており1号棺に先行すること，そして2号における埋葬は今度は北に寄りすぎていることなどは，2基とすれば不可解である。1・2号の「共有溝」から人骨が1体分攪乱された状態で検出されていること，1・2号の墳丘の土層構成が共通していることもあわせ判断すると，「共有溝」はすべての埋葬が終了した後に掘られたとみられるので，本来は1・

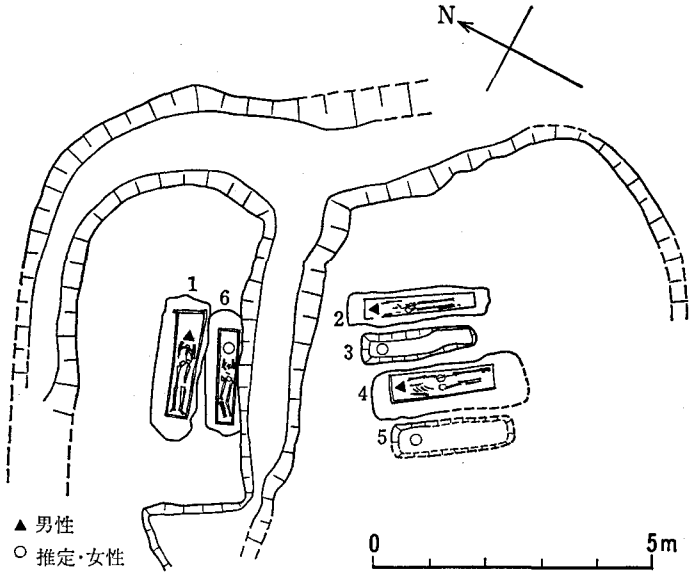

図7 八尾市亀井遺跡の墳丘墓（中西ほか編 1982原図から作成）

表3 亀井1・2号墳丘墓の被葬者（？は推定）

	性	年齢	墓坑長	墓坑幅	木棺長	木棺幅
1	♂	A	2.25	0.75	1.96	0.57
6	♀？	A	2.18	0.70	1.74	0.48
2	♂	M	2.25	0.60	1.95	0.35
3	♀？		2.01	0.50～0.36	——	——
4	♂	A—M	2.76	0.79	1.98	0.55
5	♀？		？	？	——	——

2号あわせて1基であったと考えておきたい。その場合の墳丘規模は，推定12m×8mほどである。

時期は，墳丘盛土内から検出された土器片が第Ⅲ様式（古）から（新）であった事実から，第Ⅳ様式期であると推定されているが，第Ⅲ様式（新）までさかのぼる可能性は残されていると思われる。

人骨が遺存し性が判明したのは，1号・2号・4号でいずれも男性である。残りの墓のうち，6号は報告書では「下顎骨から見て男性の可能性が強い」としながらも，推定身長が155cm位で男性とすれば低いことから身長約145cmの小柄な女性の可能性も述べられている。6号は木棺の長さが明らかに男性のそれよりも21～24cm短いので，男性とすれば少年，そうでなければ女性ということになろう。また，3号は，木棺をもたない土坑墓であったが，墓坑の長さが男性のそれよりも24～75cm短く，幅も20cm以上短いので，やはり女性と推定される。5号も土坑墓とされているが，完掘されなかったために墓坑の規模は明らかでない。しかし，隣接する4号に比べると北端が南に寄っているので，墓坑の長さは4号より短い可能性がある。そうとすれば，5号も女性と考えることもできよう。

以上のように，3号，5号，6号を女性とすれば，それぞれ隣接する男性の墓と対をなしていた可能性は大である。そうとすれば，注目すべきことは，3号・5号が木棺をもっていない事実であって，性の不確実な6号女性？が木棺をもっているとしても，埋葬施設において女性が劣位におかれている状況を看取できるのである。

f　大阪府茨木市・東奈良遺跡

本遺跡は，淀川北岸の北摂平野に所在する拠点集落址で，銅鐸鋳型の出土により著名である。ここでとりあげる例は，1971—72年に住宅開発事業に先だって東奈良遺跡調査会によって，F－4－NとG－4－B地区から発掘された1号「方形周溝墓」である（東奈良遺跡調査会　1979)。

墳丘部は7.6m×6.0m，周囲に幅0.8m内外の溝をめぐらせているが，南西隅だけは掘り残されて陸橋部となっている。埋葬は，墳丘中央部に並列する木棺墓2基があり，さらにその周囲に土坑墓5基（1～5号）がある。また，周溝中に土坑墓状の凹みが2個所（6・7号）あるほか，陸橋部にも土坑墓1基(8号)，周溝外に土坑墓5基（9～13号）がある。

1号木棺の墓坑の深さは確認面（周溝外と同レベル）から8cm，2号のそれは12cmにすぎなかった。したがって，墳丘高は木棺の高さに埋土の厚さを加えると，1m前

後はあったことになろう。

木棺墓の1号は，墓坑長2.23m，木棺底板長1.6m（復原長1.8m）であるのに対して，2号は同1.6mで，木棺は腐朽著しく発掘時には長さ0.8mの底板が遺存していたにすぎない。しかしながら，後者は復原しても長さ1.2mほどであるので，屈葬でなければ幼児を埋葬していたのであろう。

他の土坑墓は，1号が長さ1.7m，2号が1.25m，3号が1.2m，4号が1.5m，5号が1.0mで，1号以外は成人の伸展葬は考えられない規模をもっていた。8号は径0.8mの円形で，遺体は残っていなかったが，土器の底部がかぶせてあった。

なお，3号土坑墓は1号木棺墓に一部切られており，最初の埋葬が木棺墓でなかったことを示していた。

墳丘墓の時期は，盛土中および周溝の一部を切ってつくられている10号土坑墓の埋土中に第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式の土器片が含有されていた事実からすると，第Ⅳ様式の可能性があるが，周溝中の7号土坑墓（？）に横転していた壺形土器が第Ⅲ様式（新）であったことから，第Ⅲ様式（新）～第Ⅳ様式とされている。すなわち，土器編年のうえで分離困難な問題のある時期である。

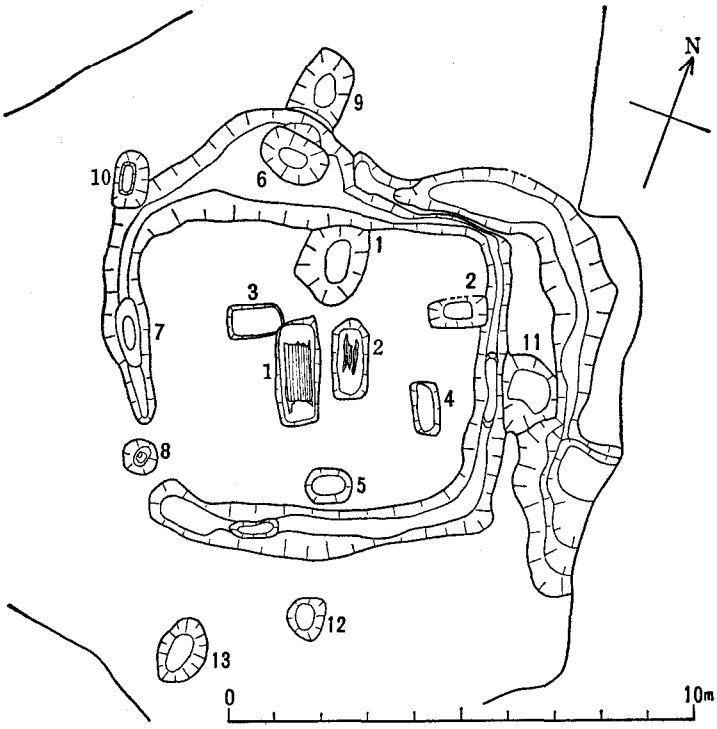

図8 茨木市東奈良遺跡の墳丘墓（東奈良遺跡調査会 1979原図）

g　大阪府豊中市・勝部遺跡

本遺跡は淀川の北岸，西摂平野の中央東寄りに位置する弥生前期以来の拠点集落である。1967年に大阪空港拡張のために，勝部遺跡発掘調査団によって事前調査され，組合式木棺墓10基，土坑墓1基，土器棺墓2基が検出されている（勝部遺跡発掘調査団編　1972)。

それらは，1区から3基，2区から10基見出された。両地区は26m離れているが，南西一北東方向に1列に並んでいる。墳丘は，上部が中世に削平・整地されていたために，その存在は確認されていない。ただし，1区の東側にコ字形に幅3m，深さ35cmの浅い溝（第1溝）が遺存し，その溝の中央で壺棺墓と覚しき土器片が散乱状態で発見されたことから，「方形周溝墓」の可能性も考えられている。また，2区の場合も，墓群の東南に幅1.8mの溝（第3溝）があり，その西南の末端から甕棺墓が検出されている。この溝は，前者よりも一層しっかりしたものであって，2区の墓群の東南を区画していたと考えてさしつかえない。しかし，同様の溝は少なくとも墓群の西南側には認められないから，2区の墓群を全周するような溝は存在しなかったとみなければなら

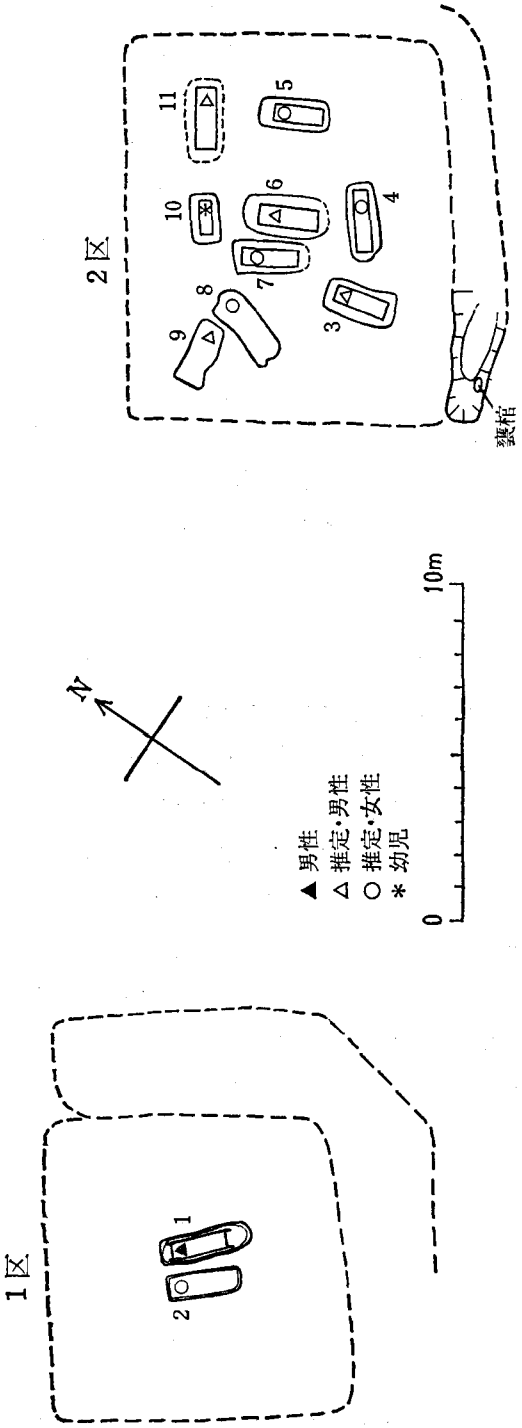

図9　豊中市勝部遺跡の墳丘墓
（勝部遺跡発掘調査団編　1972原図から作成）

ない。ただ，封土の遺存状態が良好であった前記の瓜生堂2号墳丘墓において，墳頂部から約40cm下のレベルに木棺の側板上面が位置していた点を参考にすれば，2区の中央に位置する6号木棺の場合も，検出面は側板の上面であったから，その上に埋土を復原すると当然地表面は数十cm高くなる。したがって，先の第3溝の存在と合わせ考えるならば，1m未満ではあろうが墳丘の存在を想定せざるをえなくなろう。そして，墳丘の形状は，木棺の方向，周溝の方向からして，方形を考えるほかない。

埋葬は，木棺（または土坑墓）の2基が並列またはL字形に配列されている。その組み合わせは，1号—2号，3号—4号，5号—11号，6号—7号—10号，8号—9号である。人骨の保存状態は，良好なものから消滅したものまであったが，鑑定の結果は，1号が成人男性，10号が少年であることしか報告されていない。そこで，発掘現場で測定した大腿骨長が，3号は関節部を欠損した現長が38cm，6号は41cm，9号は41～42cmであったという記述を頼りにすれば，この3体はいずれも男性と推定できる。残余の木棺墓については，性の推定は困難である。ただし，2棺対となっているもの同士を比較すると，木棺の底板幅において数cmの差が認められ，その場合は常に男性と推定したほうの幅が広い。そこであえて臆測すれば，11号は男性，4号・5号・7号・8号は女性，それから土坑墓の2号も女性ということになる。

そうであれば，勝部遺跡の1区・2区すなわち1号墳丘墓，2号墳丘墓においても，成人男女各1人を結合単位として，一墳丘内での埋葬が継続されていることを確認できるわけである。そして，2号においては本遺跡でもっとも「豪華な作り」とされている6号木棺墓が墳丘の中央に位置しているが，その被葬者が男性と推定可能なことは重要である。1号墳丘墓と2号墳丘墓の時間差については明らかでないが，時代の趨勢からすると，埋葬数の少ない1号はそれの多い2号よりも後出の可能性が考えられる。もしそうなら，第一に墳丘墓の被葬者層が限定され減少しつつあったこと，第二に1号墳丘墓の2号主体が木棺をもたない女性であったとすれば，2基の墳丘墓が営まれている間に男性の女性に対する優位が一層進行しつつあったことを，窺い知ることができよう。

h　兵庫県尼崎市・田能遺跡

本遺跡も西摂平野中央東寄りに位置する拠点集落址で，勝部遺跡の西わずか1.2kmの地点に所在する。1965—66年に園田配水場建設のために尼崎市教委のちに田能遺跡発掘調査団による調査が行われた。その時に第4調査区の西南隅の弥生中期に属するL字形の周溝内部から木棺墓2基が検出されている（福井編　1982)。

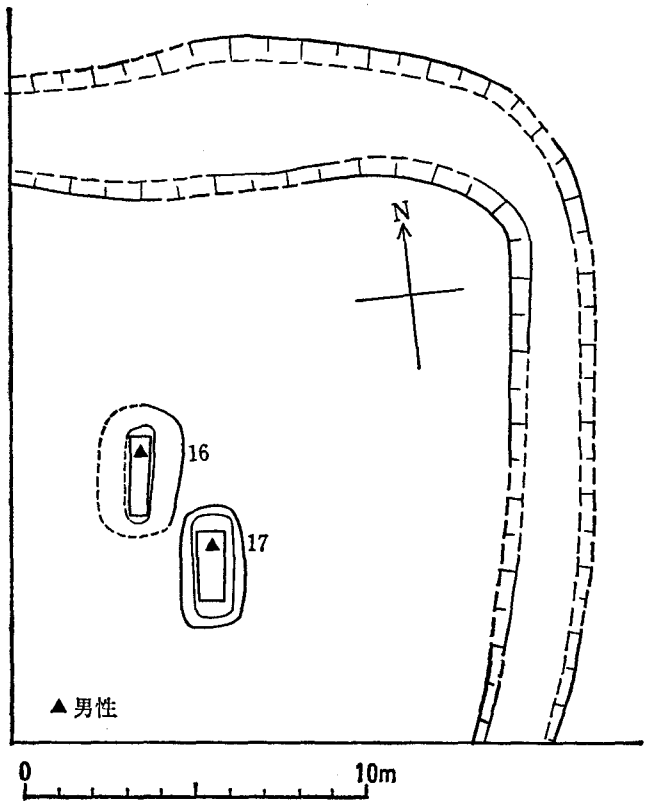

図10 尼崎市田能遺跡の墳丘墓

（福井編 1982原図から作成）

3号周溝墓は，完掘されていないが，後述の17号木棺墓を墓域の中心とみるならば，18m×22mほどの方形部の周囲に2～4m幅の溝がめぐらされていたことになろう。墳丘の存在は確認されなかったが，木棺の遺存状況から判断すると，1m内外の高さの盛土があったと考えたほうが自然であろう。

墓葬は，斜めに並列する16号と17号の2基の木棺墓だけであるとみてよい。前述のように墳丘の存在を想定するならば，2棺の墓坑は一部切り合っていたことになろう。常識的に考えれば，墳丘中央の17号が古く，16号が新しい可能性が強い。16号は，木棺長2.35mで老年男性が葬られ，首飾りであろう632個以上の碧玉製管玉が首から胸にかけて残されていた。17号は木棺推定長2.2m，やはり成人男性で，左腕に銅釧1個を着装していた。ともに頭位は北，木棺はコウヤマキ製で，底板上に小口板をのせる組合式のものである。

その時期は，周溝内から多量の第Ⅳ様式土器が出土していること，1号墓出土の銅釧の型式が神戸市兵庫区夢野出土の第Ⅳ様式の甕形土器に約40個容れられていたゴホウラ製貝輪を祖型とするものであったことから，第Ⅳ様式の可能性が強いと考えられている。

以上のように，田能遺跡3号墳丘墓では，2基の木棺墓を中央に配置しながら完全に並列させることはしていない。これはおそらく被葬者が2人とも男性であることと関係するのであろうが，発掘範囲内では弥生中期に属する墳丘墓はこの1基だけであったこととともに見すごすことのできない特徴点として挙げられよう。また，畿内の弥生中期に属する墓としては唯一装身具を着装していたこと，第Ⅳ様式期と推定される時期に依然として豪華な木棺が使用され，墓制に一種の崩れがみられないことも注目されるところである。

i　夫妻併葬墓の出現

以上に概略を述べてきた河内・摂津地域の弥生中期の墓制を要約すれば，次のようになろう。

第Ⅱ様式期　中期初頭（第Ⅱ様式期）は，山賀遺跡でみるかぎり，一墳丘一埋葬の傾向が強く，それがいくつか集合して一つのまとまりを形成している。まとまりの大きさは完掘されていないために明らかでないが，その中には成人のほかに幼児まで含まれていることは確実である。

また，安満遺跡9地区の場合は，墓坑が残っている例では，墳丘墓1基に1～5人の埋葬が認められる。しかし，同じ安満遺跡の京大農場東側の調査区では，内部主体の存在が確認された4基はいずれも単人葬であった。後者は71基をはるかに上まわる基数からなる墓地であること，規模が1辺5～7m大の小形のものが多いことを考慮すれば，他も単人葬，さもなければ少人数埋葬であった可能性が大きいと思われる。

山賀・安満両遺跡とも墳丘墓が数基集まって1グループをつくっていることは明らかであるが，その内部に夫妻関係にある男女の墓を含んでいると推定しうるほどの資料は不足している。したがって，このグループが一世帯の墓群になる可能性は大きいにもかかわらず，完全なそれであると断定することは差し控えておくべきかもしれない。

木棺の型式は，山賀遺跡では墓坑の底部両端に小口板を打ちこむⅠ型が主体であるが，底板上に小口板をたてるⅡ型も少数伴っている（図11）。材質は，Ⅰ型がヒノキ材を主に使用しているのに対して，Ⅱ型はコウヤマキを用いている。

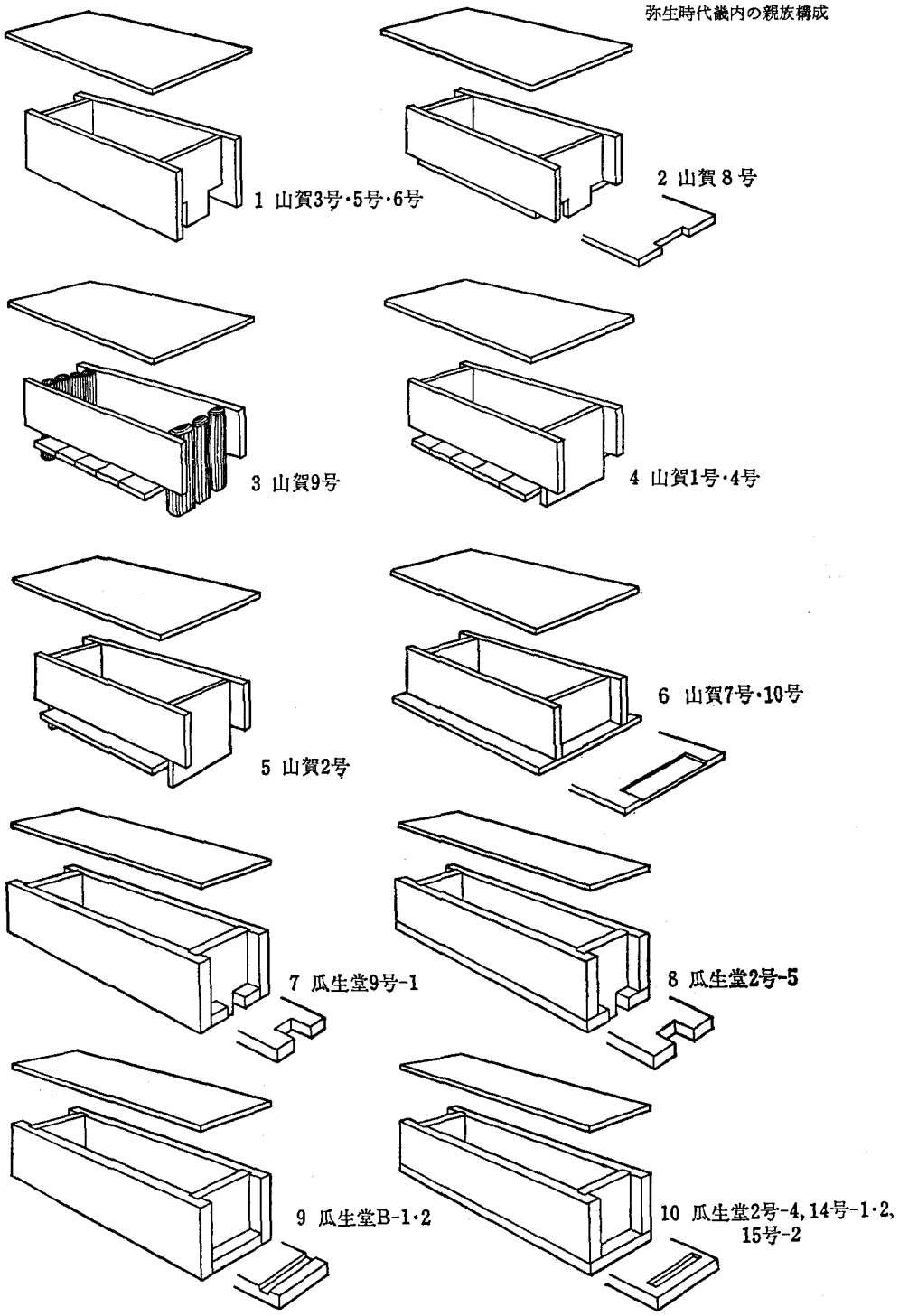

図11 組合式木棺の諸型式（Ⅰ型 1～5・7・8, Ⅱ型 6・9・10, 山賀遺跡 第Ⅱ様式期, 瓜生堂遺跡 第Ⅲ様式期）
（大阪文化財センター編 1984, 瓜生堂遺跡調査会 1981原図から作成）

Ⅰ型とⅡ型のちがいについてみると，北九州弥生前期の福岡市板付遺跡第Ⅰ区台地（後藤・沢編　1976）では，墓坑の形状からすると47基のうち24基がⅠ型である。そして，これらは発掘区の中央部から北側にかけて集中的に分布している。残りの23基のうち少なくとも14基は木棺使用の形跡を認めがたい土坑墓であって，これらは発掘区の東側に群集している。墓坑の長さからすると，これらは成人を屈葬した在来の葬法の可能性がある。したがって，ここではⅡ型は10基未満にすぎない少数派である。同じ板付遺跡G－5ａ地点（山口編　1976）でも，Ⅰ型が14基に対して，Ⅱ型は多く見積もっても8基である。そして，Ⅱ型のうち3基までは確実に幼児の墓である。

同じく弥生前期末～中期初の小郡市津古内畑遺跡A群(西谷編　1970)においても，木棺墓11基は成人・幼児を問わずすべてⅠ型で，同B群（柳田　1972）では8基の墓のうちⅠ型が3基，Ⅱ型？が2基（幼児），土坑墓が3基で，同C群(柳田　1972）では3基の墓はすべてⅠ型木棺墓である。

ところが，同じ小郡市の北牟田遺跡（橋口・森田　1979）の場合は，47基の墓のうちⅠ型が12基，Ⅱ型が19基，残り16基は土坑墓であって，Ⅱ型の数がⅠ型を凌駕している。しかし，ここでは墓群は3小群に分かれ，うち1群は南半部を破壊されていると推定しうるから，その部分を復原すると，Ⅰ型とⅡ型はほぼ同数になると考えられる。注目されるのは，それぞれの小群のなかでⅠ型が明らかに中心的位置を占めているとみられることである。

四国でも，愛媛県松山市上野町西野Ⅲ遺跡（長井編　1979）の弥生前期の墓70基のなかには，Ⅰ型の木棺の痕跡が17基認められている。

そして，畿内の弥生前期も同型式であったことが，大阪府堺市四ツ池遺跡45地区（樋口ほか編　1979）で確認されている。これは斉一性をうたわれる弥生前期の遠賀川式文化は，木棺の型式にまで及ぶものであったことを示している。したがって，畿内の第Ⅱ様式期のⅡ型木棺はⅠ型から派生した新しい型式であると考えてまず間違いない。いいかえれば，Ⅱ型は棺材にコウヤマキを利用し始めたこととあわせて，畿内の地域色の顕現を示すものである。しかしながら，Ⅰ型はⅡ型が主流となった第Ⅲ様式期においてもなお，少数は製作・使用されている。

第Ⅲ様式期　それでは，第Ⅲ様式（古）期の瓜生堂遺跡（小阪ポンプ場内）におけるⅠ・Ⅱ型のこの併存は，何を意味しているのであろうか。Ⅰ型が検出されたのは2号および9号墳丘墓であるが，前者の5号木棺墓がつくられたのは，3代にわたる男女併葬の最後の代である。したがって，一墳丘墓における時期差として説明するこ

とはできない。この場合は棺材にはⅡ型と同様にコウヤマキを用いながら，意図的にⅠ型に加工してⅡ型と区別しているのである。その一方，9号墳丘墓の唯一の木棺の場合は，Ⅰ型を採用し，棺材にはヒノキを用いて，Ⅱ型との区別を一層鮮明に際立たせているのである。

ここで注意されるのは，2号の4号土器棺のなかに摂津産の甕が含まれていること，同様に2号および9号墳丘墓の供献用土器にも河内産のほかに摂津産の壺がみうけられることである。2号の場合は，この搬入土器は墳丘の北裾の西寄りに1個，東裾に2個おかれており，それぞれ1号木棺と5号木棺の女性に比較的近い位置にあったが，なおこの女性に伴うという証明まではできない。それに対して，9号の場合は被葬者が1人だけであるから，Ⅰ型木棺の被葬者に摂津産の土器が供献されていることは確実といえる。この事実は，被葬者がもともと摂津の出身者であり，葬送儀礼の際に摂津からの参列者があったことを示唆しているのではないだろうか。

それでは，Ⅰ型木棺は第Ⅲ様式期に摂津の地方型式として存在するのかというと，けっしてそうではない。摂津地方の諸遺跡からの出土例によると，当該期の木棺は河内と同様にⅡ型が主体なのである。したがって，瓜生堂遺跡2号および9号墳丘墓の木棺の型式および樹種は，あくまでも瓜生堂集団の構成員たちによって選択されたと考えるほかない。

ところで，勝部遺跡出土木棺はすべてコウヤマキ製であったが，そのうちに大形で特に入念な作りを示す6号木棺は含まれていた。安満遺跡の場合も同様に，もっとも立派な木棺はコウヤマキであった―他の木棺もそうであったが―。さらによく知られているように，次の古墳時代前期の首長墓の長大な割竹形木棺の材種として採用されたのはコウヤマキであった。これらの事実から，木棺の樹種としてはコウヤマキが最高の位置を占めるという基準があったと推定して誤りはあるまい。とすると，瓜生堂9号墳丘墓のⅠ型木棺がヒノキ製であった事実は，この時期にはⅠ型がⅡ型よりもランクが下であったことを示唆する。後でもふれるように，婚入者をその土地の出身者よりも低くみるという意識は縄文晩期にひろく認められる傾向であるが，その風潮の残存を考慮するならば，この点も第Ⅱ様式期のⅠ型木棺の被葬者に婚入者をあてる推論の傍証となろう。

このような手続きを経て明らかになることは，瓜生堂遺跡2号墳丘墓の5号木棺女性が婚入者であったこと，9号墳丘墓の1号木棺被葬者の推定・男性も婚入者であったことである。換言すれば，この時期の河内の社会では男・女の婚入・婚出が存在したのである。問題はその割合である。しかし，ここで手がかりとするⅠ型木棺の数

は，2号墳丘墓の成人棺6例中1例だけというように，きわめて少ない。といって，成人6人のうち1人だけが婚入者であったということは，男女の2棺ずつが並列されている点からみて考えにくい。この場合にはむしろ，埋葬の場において婚入者を区別するという意識が大幅に後退していく過程としてとらえ，同じ婚入者であっても，ある場合はⅠ型にし，別の場合はⅡ型にしたと考えるのが妥当であろう。

摂津からの搬入土器の存在を参考にすれば，一つの可能性としては，通常の通婚圏の外部と内部のちがいが考えられよう。いずれにせよ，Ⅱ型木棺の被葬者のなかにも婚入者は含まれると考えたほうがよい。そうであれば，2号墳丘墓の場合，墳丘上で占める男性被葬者の空間的位置から判断すると，1号・2号木棺の女性も婚入者であった可能性が強い。すなわち，2号墳丘墓では女性は3人とも婚入者であった，と私は推定したい。そこで，9号墳丘墓の被葬者を男性婚入者と先に推定したこととあわせ，この時期の瓜生堂集団においては，夫方居住婚がすでに支配的となっていた，と結論づけておきたいのである。

以上のように，第Ⅲ様式期において，1墳丘内に併葬された男女の2棺の被葬者が夫妻関係にあったとすれば，第Ⅱ様式期の山賀遺跡がいくつかの墳丘墓からなるまとまりをもっているにせよ，1墳丘1被葬者であったことと比較して，この時期に畿内の墓制ひいては親族構造のうえに，新たな状況が到来したことを意味するといえよう。また，1墳丘内に幼小児をも埋葬するにいたったことは，夫妻関係を核とする世帯のまとまりが一層強固なものとなってきたことを如実に示すものであろう。

2. 弥生後期の埋葬原理

a 大阪府東大阪市巨摩廃寺遺跡

先述のJ地区の北半部に位置する3基の方形墳丘墓である（玉井ほか 1982）。

1号墳丘墓は，8m以上×9.1m，高さ1.45mの規模をもち，平面はおそらく長方形，幅1.2mの周溝がめぐらされている。調査範囲の北半分は破壊されていたが，南半分から5基の組合式木棺墓が検出された。いずれも東頭位で木棺の長軸は平行している。各棺の被葬者は遺存人骨から，1号棺が男性・老年，2号棺が4－6歳の幼児，3号棺が男性？・成人，4号棺が男性・老年，5号棺が女性？・熟年と推定されている。1号棺の頭部周辺からは微量の赤色顔料が検出されている。

2号墳丘墓は，9.9m以上×15.7m，高さ1.9mの墳丘の周囲に幅1.3mの溝をめぐ

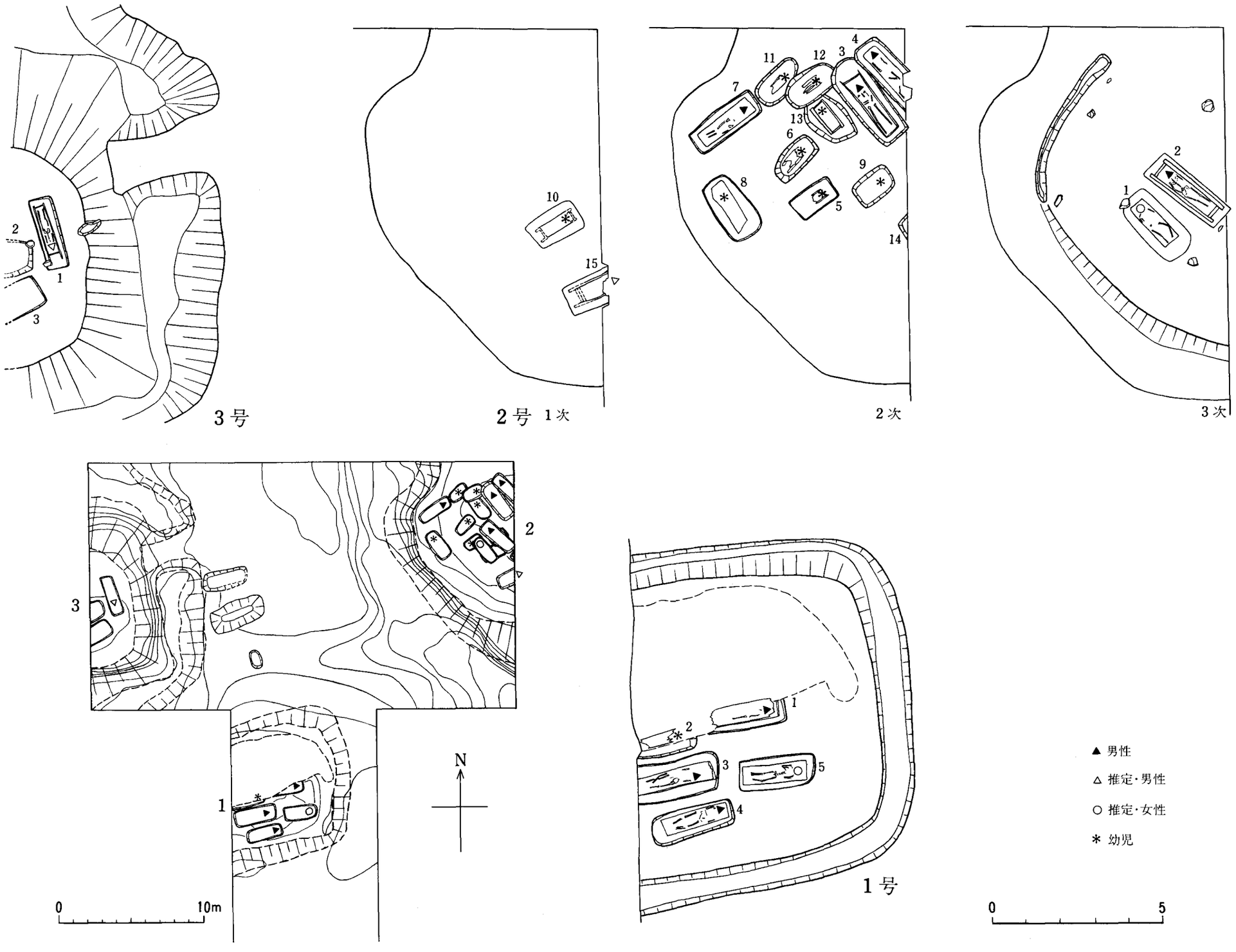

図12 東大阪市巨摩廃寺遺跡の墳丘墓（玉井ほか 1982原図から作成）

らせている。発掘調査がなされたのは墳丘の半分強と推定されるが，埋葬遺構は15基検出されている。墳丘の盛土は3時期にわたっており，それぞれの時期に対応する埋葬主体が確認されている。第1次は2体，第2次は11体，第3次は2体であるが，発掘範囲と墳丘内の棺配置からすると，少なくとも第1次の埋葬数は本来はもっと多かったと推定される。

第1次埋葬は，15号が男性・熟年，10号が3—5歳の幼児で，後者にはガラス製勾玉1個，小玉13個が伴出した。頭位は15号が南西，10号が北東であって，2棺は反対方向を向いている。

第2次埋葬は3号が男性・熟年，4号も男性・熟年，7号は男性・壮年，5・6・8・9・11・12・13号が幼児で，8号は5—6歳，14号は部分発掘のために性・年齢とも不明である。これらの棺は，3・4・8・13号が西北頭位で平行し，5・6・7・9・11・12号が東北頭位で前者と直交する関係にある。墓坑の切り合い関係によれば，埋葬は11号・13号→12号→3号→4号の順になされている。なお，3号は「頭部周辺に赤色顔料が多量に塗って」あり，また頭部左右には耳飾と推定される管玉が1個ずつあった。

第3次埋葬は，1号が性不明・壮—熟年，2号が男性・熟年である。ただし，2号の墓坑長2.5m，木棺内法長1.82mに対し，1号の墓坑長は2.1m，木棺外法長は1.48mとかなり短いので，1号は女性の可能性が強いと思われる。2体とも頭位は西北であるから，この場合は男・女の2棺が併列されている可能性が大きい。なお，2号だけは「頭部付近には赤色顔料が塗られて」いた。

3号墳丘墓は，5.3m以上×12.3m，高さ1.32mで，幅3.16mの周溝をもっている。東辺で1個所陸橋部の存在が確認されている。発掘されたのは墳丘の東端1/3ほどで，埋葬主体は3基検出されている。1号棺は男性？・熟—老年，2・3号棺はともに性不明・成人である。ただし，2・3号とも墓坑幅が1号よりもかなり広いので，男性の可能性がある。頭部は1号が南，2・3号は東西方向である。なお，この墳丘墓の東側周溝に接して直角方向に長さ3.8mの土坑墓と土坑長3.0m，木棺内法長2.18mの2号墓（舟を転用した棺か）の2基が並列されている。これは，成人男女の可能性がある。そして，その南には木棺の内法長35cmの幼児の墓がつくられている。巨摩廃寺遺跡の方形墳丘墓は，畿内第V様式併行期の弥生後期前半に位置づけられるが，この墳丘墓群に囲まれた範囲には，純粋な畿内の土器は少なく，吉備地方の土器との深い関連を有する搬入品・類似品が多い，とされる。しかし，墓制に関するかぎりでは，前代の様相を継承しているとみなしてさしつかえないようである。

本遺跡にみられる特徴の一つは，一墳丘多数埋葬であって，その密集度は瓜生堂2号墳丘墓に匹敵するといえよう。成人だけでなく幼児も多数含んでいる点も共通するが，違う点は幼児をも木棺にいれて手厚く埋葬していることであろう。また，3基の墳丘墓の成人被葬者の性別をみると，確実なところでは男性6例に対して女性は0，不確実な例あるいは推定例を含めてみても男性は11例，女性は2例であって，両者の較差は依然としてちぢまらない。幼児は9例であるから，ここでは見掛け上は成人男性と幼児が主たる被葬者となっているのである。しかしながら，2号墳丘墓の第2次の推定男女併葬を参考にするならば，1号墳丘墓の1号男性と5号女性？は意図的な併置の可能性が考えられる。また，3号墳丘外の2基の土坑墓も男女併葬の可能性がある。本遺跡では，1号墳丘墓については西側には現在知られている以上にはひろがっていないと思われるが，北側は半分近くが破壊されてしまっている。空間的には2～3基の埋葬主体をいれる余地が十分にあるのである。また，2号墳丘墓の第2次埋葬の場合も，男性と幼児が西半分に集中していた可能性も多分にある。したがって，巨摩廃寺遺跡の後期前半においては，河内の第Ⅳ様式期に一旦乱れをみせた男女の意図的で整然とした併葬が復活している，と理解しておきたい。そして，その傾向が3号墳丘墓の裾部につくられた土坑墓群にも看取されることは，墳丘外の被葬者群においてもそれを実現させる原理が普遍的に存在していたことを示唆する。そうであれば，第Ⅲ様式期の瓜生堂遺跡においてもすでに認められた墳丘外の土坑墓群に関しても，この見方はさかのぼって適用しうるかもしれない。

b　大阪府高槻市・紅茸山遺跡

本遺跡は高槻市教育委員会により1970年に市立第八中学校建設のために調査された（原口　1973・1977)。詳細は未報告であるが，弥生後期の摂津の様相の一端をうかがうために，あえてふれておきたい。

遺跡は丘陵斜面標高38～48mの間に立地する一種の高地集落址で，同時期の竪穴住居址18棟，高床倉庫址1棟，方形墳丘墓5基の存在が明らかにされている。墳丘墓は一辺が10m未満で，周溝だけが遺存していた。うち2・4・5号では地山まで掘り下げた1基の墓坑が検出されている。墓坑は2号と4号では墳丘のほぼ中央に位置しているが，5号では隅に寄っている。1・3号にも埋葬主体が存在したことは確実であろうから，それを含んでいた墳丘ごと流出してしまったと考えるべきであろう。そうであれば，2・4・5号の場合も，必ずしも単独埋葬であったとは断定できないことになる。特に5号において墓坑の位置が偏っている点から，本来は複数埋葬であった

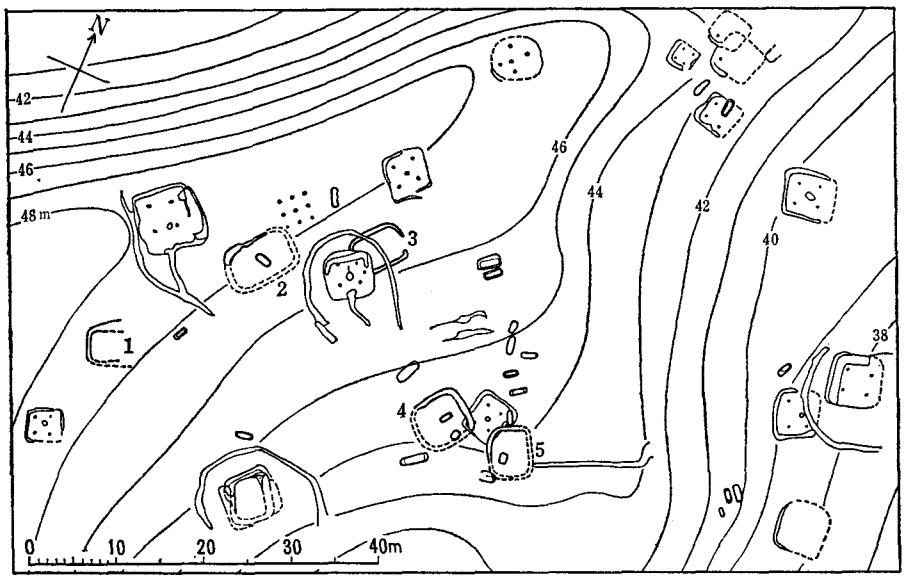

図13 高槻市紅茸山遺跡の墳丘墓（1～5）と住居址の分布状況（原口 1977原図から作成）

可能性を考えるとすれば，2・4号の場合も同様に推定する道をひらくことになろう。しかし，そうだとしても，2・4号のあり方から判断すると，1基の中心埋葬があり，その周囲に他の埋葬一中心主体との併葬という形をとるにせよ一はなされていたと考えられる。そして，その中心埋葬が男性であったことは，河内でのあり方からしても，ほぼ確実とみてよい。

c 男性優位の墓制

畿内地方の弥生後期の良好な資料はなお不足しているのであるが，とりあえず以上の2分析例からこの時期の特色を抽出するとすれば，河内では墳丘墓の中心を占める埋葬が再び顕在化してくること，その人物が男性であることを挙げうるであろう。これら二つの特色は，実は，すでに第Ⅲ様式（古）期に現われているのであるから，少なくとも河内では第Ⅲ様式期から第Ⅴ様式期前半までの間には，むしろ大きな画期が存在しなかった，ととらえるべきなのであろう。

その一方，摂津の紅茸山例では中心埋葬の存在が一層明瞭であるのは，逆の遺構の遺存度の悪さが影響している可能性もないとはいえないが，他方，第Ⅴ様式期という時期も多分に関係しているとみたい。すなわち，当該地域における前方後円墳の出現期までは依然としてかなりの時間を必要としていたであろうが，世帯の長ないし世帯共同体の長の位置が男性によって独占されつつあったことを想定することもできるか

らである。

3. 縄文晩期の埋葬原理

a 大阪府東大阪市日下町日下遺跡

河内平野の東端，生駒山西麓の扇状地に立地する貝塚を伴う遺跡である。人骨はこれまで1939年，1960年，1966年の3回にわたって計11体出土している（藤岡 1942,

表4 日下遺跡の抜歯（Aは壮年，Mは熟年，Sは老年，×は歯槽開放，△は歯槽閉鎖）

人骨番号	性	年齢	抜歯式	型式	頭位	地点	調査者
1939—1	♂?	M?		?	ほぼ東	C	中山 英司
1939—2	♀	S	−C−×／××C×	2C	〃	〃	〃
1939—3	♀	S	△C××／××C△	2C	東南	A	〃
1939—4	♀	A	−C×−／−C××／××C−／−−C−	2C	ほぼ東	〃	〃
1939—5	♂?	M		?	〃	C	〃
1960—1	♂	M	PC／C／CP／C	2C	〃	C付近	島 五郎
1960—2	♂	M	C／PC／C／C	2C	〃	〃	〃
1960—3	♂	A		?	〃	〃	〃
1960—4	?	?		?	〃	〃	〃
1966—5	♂	M	×C××／−×II／××C×／II×△	4I	〃		金関 丈夫
1966—6	♀	M	−C−−／△△II／−−C−／II△△	4I	〃		〃

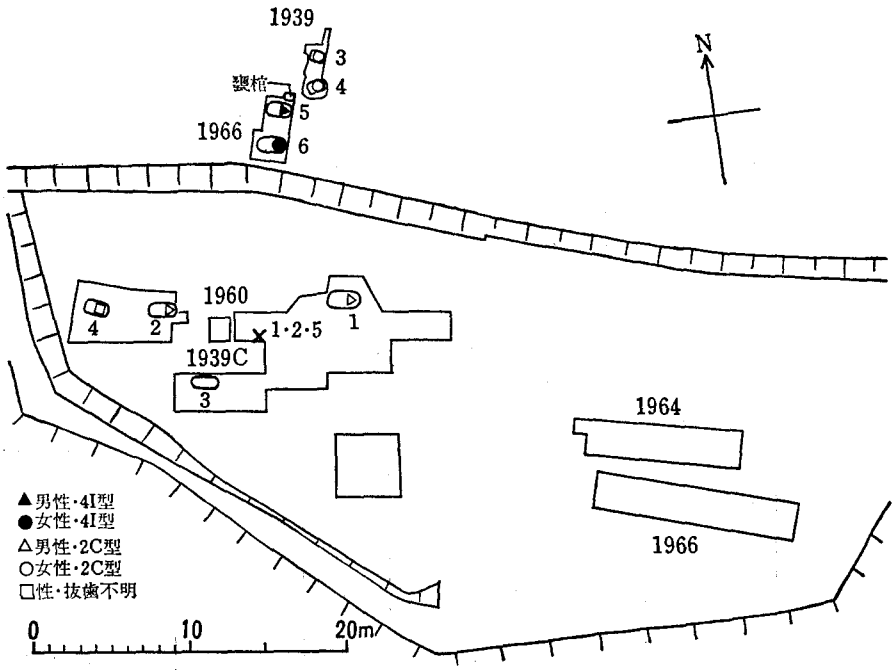

図14 東大阪市日下遺跡の遺体分布（藤岡1942，堅田 1967および堅田の教示により作成）

中山 1942，堅田 1967)。部分発掘にとどまっているために明確にはいいにくいが，人骨は遺跡の西縁に半円形に分布しているようにみえる。あるいは，中央に居住区がありそれを墓地区が弧状ないしは環状にとりまいているのであろうか。人骨の性・抜歯型式が判明したものは，表4のとおりである。

これらの発掘地点は，1939—3・4号が遺跡の北側のA地点，1960—1・2号が西側のC地点付近，1966—5・6号がA地点付近であったが，各々2体は近接しており，それぞれは同グループとみてよいものであった。1939—3・4号と1966—5・6号は近い位置にあるようだが，その間に境界があると考えてよければ，日下遺跡では抜歯型式を同じくする者同士が近接して埋葬されていることになろう。なお，頭位方向はすべてほぼ東で統一されている。ただし，1939—3号と4号は2.5m離れている女性同士であるが，頭位は約45度異なる。注意すべきは，1966—5号と6号でともに4I型の熟年男女で約3mの間隔をおいて並葬されている。そして，5号のすぐ北に滋賀里Ⅲ式の甕棺が埋められていた。

抜歯型式と性との関係は，4I型が男女各1例，2C型が男性2例，女性3例で，どちらの型式も男女相半ばしているとみてよいだろう。

b　大阪府藤井寺市道明寺町・国府遺跡

古くから有名な遺跡で，多くの研究者によって多数の人骨が発掘されているが，人骨の出土地点，出土状況などの詳細が公表されていない資料が多く，墓域の形状を云々することは困難である。したがって，ここでは抜歯の存在とその型式から縄文晩期と推定可能な例だけをとりあげる（表5）(小金井　1917・1919，長谷部　1920，清野・宮本　1926，島　1963，大阪府教委　1971)。

表5　国府遺跡の抜歯（Jは若年，MΛは叉状研歯）

人骨番号	性	年齢	抜歯式	型式	調査者	備考
鳥居2(イ)	♂	M	×C×× ／×C×	2C	小金井良精	鳥居龍蔵発掘
〃 2(ロ)	♀	M	IIC−	4I2C	〃	〃
小金井2	♂	M	−C−−　−−C− −C−−　−−C−	2C	〃	小金井・柴田常恵発掘
〃 9	♀	A	−CΛM　MΛC− −CII　IIC−	4I2C	〃	〃
浜田3	♂	M	PC−−　△−C− −−−−　−−−−	0	長谷部言人	腰飾・耳飾着装，身長166.9cmの長身縄文人
〃 4	♀	A	−CII　IIC／	4I2C	〃	
〃 6A	♂	M	−C−−　−IC− −C−−　−−C−	2C	〃	7号♀と合葬，弥生前期？
清野・宮本3	♀	M	××II　II××	4I	清野・宮本	腰飾着装
〃 5	♂	J	−−C− −−−−	0	〃	
〃 6	♂	M	PC−−　−−C−	2C	〃	
島3	♂	A	−CΛM　××C− −C−I　I−C−	2C2I	島　五郎	
大阪府教委1	♀	A	−CΛM　MΛC− −CII　IIC−	4I2C	池田　次郎	

抜歯型式と性を確定できる12体のうち，男性は２Ｃ型４例（うち浜田６Ａ号は上顎左側歯も抜去している点からすると弥生前期の疑いもある），2C2Ｉ型１例，Ｏ型２例であるのに対して，女性は４Ｉ型１例，4I2C型４例である。これを単純化すれば，４Ｉ型は女性５例のみ，２Ｃ型は男性５例のみということになり，抜歯型式と性とが完全に一致する点が注目される。

c　滋賀県大津市滋賀里遺跡

1971―72年の湖西線建設のための事前調査によって墓地区が明らかにされた（田辺・加藤編　1973）。遺跡そのものは，縄文後期末以降晩期の全期間にわたる遺物を出土しているが，墓地の時期幅はより狭いようである。南北約34mの範囲から土坑墓81基と甕棺墓25基が検出されているが，後者の土器型式は滋賀里Ⅲ～Ⅴ式であってⅠ・Ⅱ式はない。しかし，「甕棺墓と土壙墓との切り合い関係によれば，滋賀里Ⅰ・Ⅱの土壙墓の存在の可能性もありうる」と報告者はいう。いずれにせよ，晩期中葉から末に中心があることはまちがいない。

筆者は，本遺跡の墓域は径24mの円形をなすものと推定したことがある（春成1982：367）。遺体の頭位方向を基準にとると，墓群は東北を向くグループと西北を向くグループの二群に分けられる。そして，どちらも大よそ６小群からなりたっている。１小群は４体前後を含んでおり，それぞれ男女１対１の割合となっている。報告者は，土坑内に含まれていた土器片の型式を検討して，東北グループが西北グループよりも古い可能性があると考えているが，実際には各小群内の土坑墓からは各時期の土器片が出土しているので，事実はどちらのグループにも新旧の埋葬は行われていると考えるべきであろう。おそらく，東北グループと西北グループの違いは，日下遺跡における抜歯の４Ｉ型と２Ｃ型の違いに対応するものであろう。本遺跡でも男女の規則的な並葬は認められない。僅かにそれかと疑えるのは，216号男性と217号女性の例であるが，両者の位置は斜めにズレて並行しているので，偶然とみることもできる。なお，163号女性は，筆者の観察したところでは，４Ｉ型抜歯である。

d　出自別・世帯別の墓制

畿内の縄文晩期の埋葬遺跡に関する資料は，あまりにも断片的にすぎ，十分な分析を行うことは困難である。しかし幸い，隣接する東海地方西部の墓制―これも不十分な資料であるが―を参考にしうるので，以下若干の考察を付しておきたい。

日下遺跡では，近接して埋葬されている者同士は同型式の抜歯が行われている。そ

の一方，４Ｉ型と２Ｃ型の抜歯人骨群はそれぞれ１個所に集中せず，何個所かに分散している。したがって，愛知県渥美郡田原町吉胡遺跡のように，墓地は４Ｉ型と２Ｃ型を一組とする埋葬小群の数群からなりたっている可能性が考えられる。とすると大阪市平野区長原遺跡において確認された２群（松尾　1984）も，実際は弧状ないし環状に分布するより多数の埋葬小群のうちの一部なのかもしれない。この埋葬小群については，それぞれ竪穴住居を単位とする世帯の成員の埋葬が数世代にわたって続けられた結果形成されたものと理解するならば，畿内の縄文晩期にはすでに世帯の相対的自立が進みつつあったことを考えざるを得ない。

その一方，抜歯の４Ｉ型と２Ｃ型は，筆者が繰り返し述べてきたように（春成　1979，1982ｂなど），その集団の出身者と他集団からの婚入者に対応する。だから，ここでは夫と妻は世帯を構成する不可分の関係にありながらも，同集団出身者でないかぎり，埋葬小群内において明瞭に区別されるのである。

これらのことは，縄文晩期という時期が，出自（あるいは血縁）と世帯という相容れない人の基本的な結合原理の矛盾が，おそらく血縁原理の強化―それは抜歯習俗の盛行によって窺われる―により表面化してきたことを表明しているといえよう。

この時期の婚姻居住制は，抜歯型式の性別比率から判定すると，４Ｉ型と２Ｃ型のどちらも男女が半数を占める日下遺跡では選択居住婚と推定される。それに対して，４Ｉ型は女性のみ，２Ｃ型は男性のみという国府遺跡の場合は，妻方居住婚が「完全に」実行されていたと考えるほかない。筆者はこれまでは，国府集団も含めて畿内の縄文晩期はおしなべて選択居住婚であった，と述べてきたが，それは国府遺跡発掘の小金井９号人骨を「もし男性ならばきわめて繊細な体格の持主」という小金井良精氏の査定（遠藤・遠藤1979：70）にしたがって男性として扱ってきたからであった。ところがその後，小林和正氏が女性と訂正されたことを知ったので，それを採用するとこのように変更される。結局，資料数が少ないとわずか１体によって結論を大幅に変えるという事態が生じるわけである。

したがって，現在知られている資料に基づくかぎり，日下集団は愛知県吉胡・稲荷山など東海地方西部の諸集団と共通するのに対して，国府集団は岡山県笠岡市津雲などより西方の諸集団と共通する居住制をもっていたことになる。すなわち，同じ大阪湾沿岸に位置し，僅か12.4kmの間隔しかもたない２集団間で，婚姻形態にこれだけの差異が存在したのである。国府遺跡からは叉状研歯人骨が３体まで検出されており―日下遺跡からも検出される可能性は高いと予想されるが―，この特異な習俗からすると国府集団は系統的には東海地方西部に連なると考えられるので，このズレは今後の

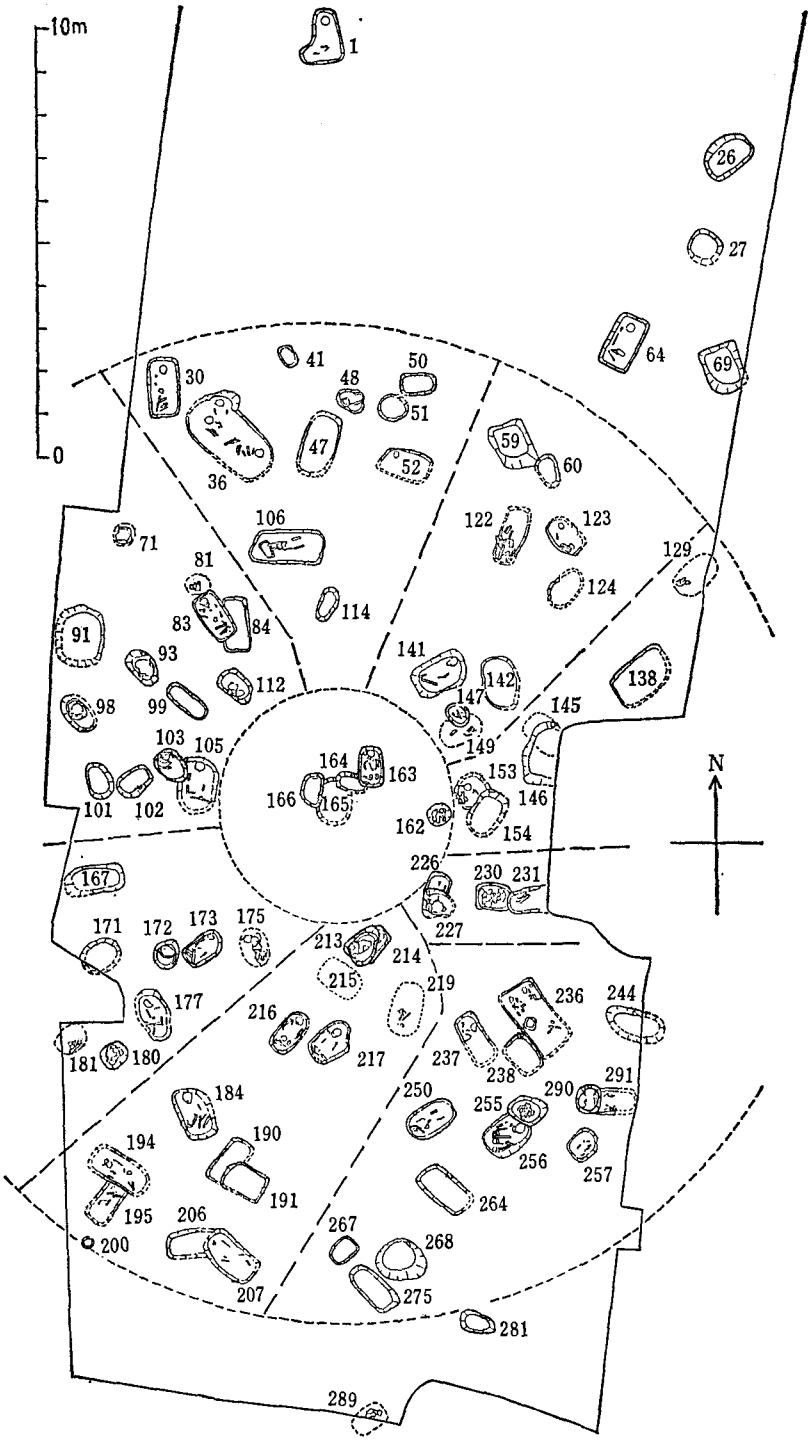

図15 大津市滋賀里遺跡の墓域構成（田辺・加藤編 1973原図から作成）

検討課題としておきたい。

4. 弥生時代畿内の親族組織の位置

a 畿内の社会

以上に述べてきたことを要約すれば次のようになろう。

畿内では，弥生時代中期中葉に，夫妻の相対的に強い結合を核とする世帯の存在が，一層明瞭になっている（瓜生堂・亀井遺跡）。かかる傾向一少なくともその萌芽形態一は，地方を異にするが，山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡の弥生前期後葉から中期初めにかけての墓地において認められる（春成 1982a：363～364）。ということは，大阪府和泉市池上遺跡のI－1号墳丘墓（第2阪和国道内遺跡調査会 1971：第2部，7～8）における長さ2.35m，1.68mの長短の土坑墓2基の場合も，それと同じとみる解釈を可能にする。すなわち，夫妻の強い結合関係は，弥生農耕社会においてはじめて実現したものである。

いうまでもなく夫妻のどちらかは他集団出身者であるから，それは血縁の有無にとらわれない新しい結合の形態が顕在化してきたといえるだろう。婚姻は，一般的には例えば中・南河内といった一定地域内で完結したと推定されるが，瓜生堂2号および9号墳丘墓のI型木棺の被葬者を摂津地域の出身者とすれば，通常の通婚圏をこえて

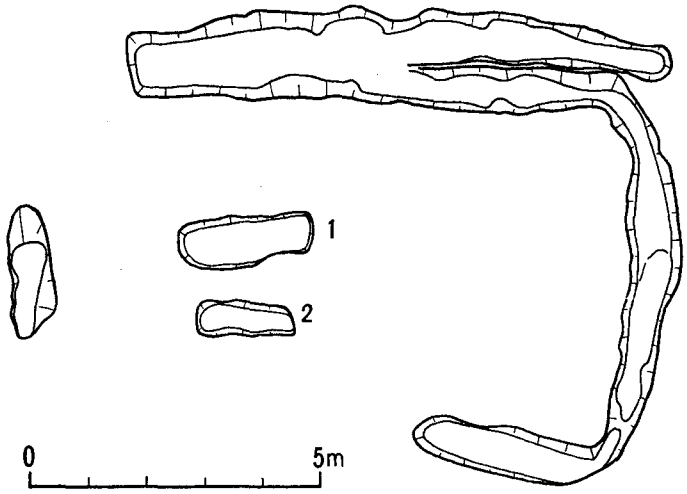

図16 大阪府池上遺跡I－1号墳丘墓
（第2阪和国道内遺跡調査会 1971原図）

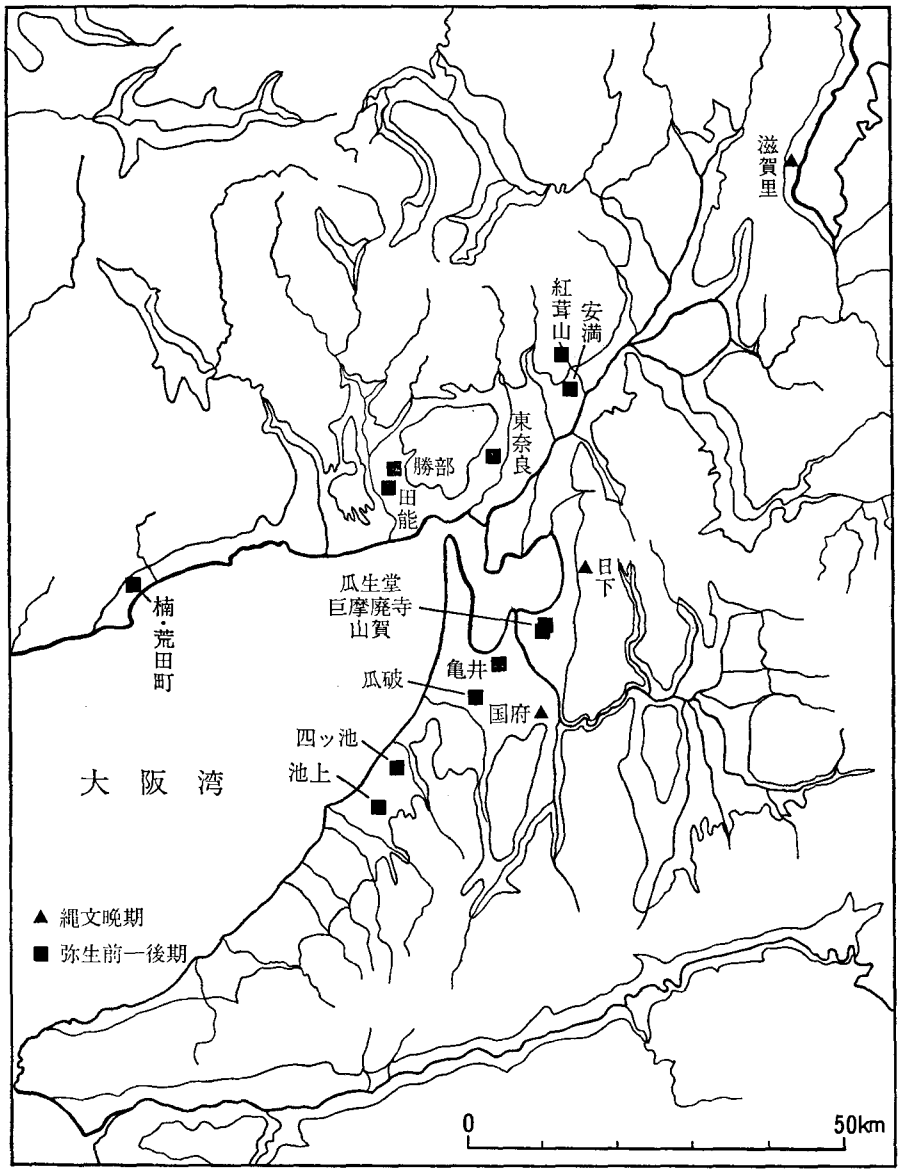

図17　本文関係遺跡の位置

成立することもあったと考えられる。その場合は，木棺の型式や材質を違えるほどの他所者に対する区別意識をもっていたことになる。しかし，縄文晩期には通婚圏内の隣接集団からの婚入者の場合でも，他所者として生前の抜歯，死後の墓地において厳格に区別していたことを想起するならば，それは大きな変化であった。

この時期の婚姻関係成立後の居住制について厳密な割合を示すことは困難であるが，瓜生堂2号および9号墳丘墓のあり方から判断すると，夫方居住が優勢であったことだけは確実といえよう。畿内の縄文時代晩期は妻方居住婚または選択居住婚とみられるから，これは農耕社会にいってからの変化と考えるべきであろう。

この変化は，男性を優位とする社会の形成と表裏の関係にあったらしく，墓制における男性優位はすでに中期第Ⅲ様式古段階（瓜生堂2号，亀井遺跡）に明瞭に確認できるのである。そして，後期第Ⅴ様式期の巨摩廃寺遺跡でみるかぎり，その傾向はこの時期にはすでに決定的となっている観がある。

夫方居住婚の優勢，男性優位は次の変化を惹起する。瓜生堂2号墳丘墓における3基の男性の墓が先代の墓坑を一部切ってつくられている象徴的な行為から推定すれば，男性系譜による親族組織が形成されつつあったように思われる。おそらくこれらの動向が，来たるべき古墳時代首長の性格を規定するとともに，古墳時代社会の基盤を用意したのであろう。

b　北九州の社会

それに対して，北九州の中期には，墓地において世帯の存在を示す痕跡はあるが，畿内のように，それを墳丘によって他と厳格に区別することは行われていない。また，瓜生堂2号墳丘墓にもっとも鮮明に示されている夫妻の併葬は，北九州ではまったく確認できない。すなわち，世帯の相対的自立化は畿内ほどには進んでいないと判断せざるをえない。むしろ，中期には2列配置の甕棺墓地の存在からうかがわれるように，出身集団にもとづいて構成員を二分する傾向を依然として強くもっていたのである。もっとも，前稿では北九州でも福岡平野中枢部の甕棺墓地の分析を行っていない。しかしながら，それも部分をみるかぎりでは，群別は可能であるけれども夫妻の併葬が認められないだけでなく，群の内部は雑然とした様相を呈している。すなわち，墓制からは，明瞭な系譜関係によって秩序づけられた親族組織の存在はうかがえないのである。それと関連して，婚姻後居住制については，選択居住婚の傾向が濃厚である。その反映としての副葬品・着装品のあり方を若干例示しよう。弥生中期後葉，第Ⅲ様式（新）併行期の福岡県飯塚市立岩遺跡（立岩遺跡調査委員会編　1977）

では，中国鏡を副葬されていた甕棺墓被葬者4例のうちに男性3例のほか女性？が1例含まれている一方，貝輪着装者は男性2例，女性2例である。九州中期中葉～後期初の佐賀県三養基郡二塚山遺跡（石隈ほか編　1979）でも，鏡の副葬は男性1例に対して女性2例であった。すなわち，北九州中期にはまだ，畿内ほどには男性の優位は確立していないのである。

c　畿内と北九州の比較

以上にみてきたように，弥生時代中期の畿内と北九州の親族組織を単純に比較するならば，畿内は夫方居住婚の優勢，男性の優位に基づく父系制的傾向をもっているのに対して，北九州は選択居住婚，拮抗関係にある男女からなる不安定な集団の傾向をもっていることをそれぞれの特徴とする。そして，畿内では世帯の相対的自立が進み，それを前提とする世帯間の階層分化が進行している。それに対して北九州でも，中期後半には立岩遺跡等で甕棺墓の被葬者層が限定されてくるという指摘がある（高倉　1978：11～15)。そうであれば，この地方においても階層分化が進行しつつあったのである。しかしながら，北九州では中期全般を通して，代々の世帯員の墓を他のそれから視覚的に画する機能をもつ墳丘の顕著な発達をみない点から判断するかぎり，世帯の相対的自立化傾向はなお緩慢に進みつつあったと考えられる。したがって，親族組織ひいては社会構造の面において，畿内が北九州よりも相対的に進んでいたことは確かにいえると思うのである。

(1984・11・20)

謝　辞

瓜生堂遺跡の調査中に現場で教示いただいた現・大阪府教育委員会・今村道雄，阿部幸一氏，国立歴史民俗博物館に展示中の同遺跡模型の製作にあたって便宜をはかっていただいた同両氏ならびに大阪文化財センター・中西靖人，上西美佐子氏，巨摩廃寺遺跡について教示いただいた大阪府教委・玉井功氏，弥生中期土器の編年に関して教示いただいた大阪文化財センター・井藤暁子氏，日下遺跡の人骨出土地点について教示いただいた帝塚山大学・堅田直氏，文献入手にあたってお世話になった大阪大学・都出比呂志氏に謝意を表する。また，困難な状況下の調査のなかから貴重な資料を世にだされた調査担当者の諸氏に敬意を表する。

参考文献

石隈喜佐雄・七田忠昭(編)　1979『二塚山』佐賀東部中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，佐賀県文化財調査報告書，46，佐賀県教委。

井藤暁子　1983「近畿」(佐原眞編)『弥生土器』Ⅰ，201～273，ニュー・サイエンス社。

瓜生堂遺跡調査会　1973『瓜生堂遺跡』Ⅱ，瓜生堂遺跡調査会。

瓜生堂遺跡調査会　1982『瓜生堂遺跡』Ⅲ，本文編・図版編，瓜生堂遺跡調査会。

遠藤美子・遠藤萬里　1979『東京大学総合研究資料館収蔵日本縄文時代人骨型録』東京大学総合研究資料館標本資料報告，3。

大阪府教育委員会　1971『国府遺跡発掘調査概要』大阪府教委。

大阪文化財センター(編)　1980『瓜生堂』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，本文編・図版編，大阪文化財センター。

大阪文化財センター(編)　1983『山賀』その2，近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，大阪文化財センター。

大阪文化財センター(編)　1984『山賀』その3，同上。

堅田　直　1967『東大阪市日下遺跡調査概要』考古学シリーズ2，帝塚山大学考古学研究室。

勝部遺跡発掘調査団(編)　1972『勝部遺跡』豊中市教委。

河内考古学研究会木棺研究グループ　1968「弥生時代の木棺について」『帝塚山考古学』1，8～18。

清野謙次・宮本博人　1926「国府石器時代人人骨ノ人類学的研究」『人類学雑誌』41―8，1～84。

甲元真之　1974「弥生時代の社会」『古代史発掘』4，稲作の始まり，87～98，講談社。

小金井良精　1917「河内国南河内郡道明寺村大字国府字乾の石器時代遺跡より発掘せる人骨」『人類学雑誌』32―12，361～371。

――――　1919「日本石器時代人の歯牙を変形する風習に就て」『人類学雑誌』34―3・4，349～368，付図1・2。

後藤　直・沢　皇臣(編)　1976『板付―市営住宅建設にともなう発掘調査報告書―』福岡市埋蔵文化財調査報告書，35，本篇，127～393，福岡市教委。

島　五郎　1963「大阪府国府遺跡出土の抜歯を伴う叉状研歯人骨追加資料」『近畿古文化論攷』33～38，吉川弘文館。

第2阪和国道内遺跡調査会　1971『昭和46年度第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書』4，同調査会。

高倉洋彰　1973「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』20―2，7～24，64。

田代克己・奥井哲秀(編)　1979『東奈良　発掘調査概報』Ⅰ，本文編・図版編，東奈良遺跡調査会。

立岩遺跡調査委員会(編)　1977『立岩遺跡』河出書房新社。

田辺昭三・加藤　修(編)　1973『湖西線関係遺跡調査報告書』本文編・図版編，滋賀県教委。

玉井　功・小野久隆・井藤暁子　1982『巨摩・瓜生堂』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，大阪文化財センター。

中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会　1971『瓜生堂遺跡』中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡調査概要，同調査会。

都出比呂志　1970「農業共同体と首長権」『講座日本史』1，古代国家，29～66，東京大学出版会。

――――　1974「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20―4，20～47。

――――　1979「ムラとムラとの交流」『図説日本文化の歴史』1，先史・原史，153～176，小学館。

――――　1982「原始土器と女性」『日本女性史』1，1～42，東京大学出版会。

――――　1983「国家形成期における階層化とムラ」『社会組織―イエ・ムラ・ウジ―』日

本民族文化の源流の比較研究シンポジウムV抄録，93～112，国立民族学博物館。
長井数秋(編) 1979「西野Ⅲ遺跡」『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ，153～397，愛媛県教委。
中西靖人・宮崎泰史・西村尋文(編) 1982『亀井遺跡』寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ，大阪文化財センター。
中山英司 1942「河内日下遺跡出土の石器時代人骨に就て」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』12，附1～18，図版38。
西谷 正(編) 1970『津古内畑遺跡―福岡県三井郡小郡町津古所在遺跡発掘調査概要―』小郡町教委。
橋口達也・森田 勉 1979「北牟田遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI，中巻，3～61，福岡県教委。
橋本久和 1984「安満遺跡(方形周溝墓群)の調査」『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第10回)資料』1～7。
長谷部言人 1920「河内国府石器時代人骨調査」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』4，35～83，
原口正三 1973『高槻市史』6，考古編，高槻市役所。
――――1977「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』1，113～332。
春成秀爾 1979「縄文晩期の婚後居住規定」『岡山大学法文学部学術紀要』40(史学篇)，25～63。
――――1982a「土井ケ浜集団の構造」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻，355～376，森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会。
――――1982b「縄文社会論」『縄文文化の研究』8，社会・文化，223～252，雄山閣。
――――1983a「装身の歴史―採取の時代」『季刊考古学』5，18～22，雄山閣。
――――1983b「採取社会から農耕社会へ―日本―」『社会組織―イエ・ムラ・ウジ」日本民族文化の源流の比較研究シンポジウムV抄録，113～127，国立民族学博物館。
――――1984「弥生時代九州の居住規定」『国立歴史民俗博物館研究報告』3，1～40。
樋口吉文・石田 修(編) 1979『四ツ池遺跡』第45地区発掘調査中間報告，その4，四ツ池遺跡調査会。
福井英治(編) 1982『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市文化財調査報告，15。
藤岡謙二郎 1942「中河内郡孔舎衙村日下遺跡」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』12，37～66，図版18～31。
松尾信裕 1984「長原遺跡の発掘調査」『縄文から弥生へ』3～14，帝塚山考古学研究所。
森田克行・橋本久和 1977『安満遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書，10，高槻市教委。
柳田康雄(編) 1972『津古内畑遺跡―福岡県三井郡小郡町津古所在遺跡の調査』第3次(遺構篇)，福岡県教委。
山口譲治(編) 1976『板付周辺遺跡調査報告書(3)』福岡市埋蔵文化財調査報告書，36，3～57，福岡市教委。

(本館 考古研究部)